< 5
4312
3

門 へ 5
號 4312
巻 3

俳諧發句類叢秋總目錄

秋之上

文月 初
立秋 二
初秋 五
七夕 六
星秋
星光
烏鵲橋 十
頼糸
立琴
七夕鞠
夢売夷
菓市
追火
魂待
盆
于蘭盆 十三
瓜馬
芙蓉馬
今朝秋 三
来秋 四
星逢 七
星追 八
別星
天河 九
梶葉
芋葉露
池坊立花
蓮峯入 十一
刺鯖
追隨
魂集 十二
魂集
墓集
蓮飯
麻木著 十四

灯籠
生身魂 十六
施餓鬼
地蔵祭
柳散 十九
桔梗
女郎花 廿六
蘭 卅三
太子草
菊草
益母草
切籠
盆月 十七
火文字火
衝突入（ツトイリ）
楸葉
蕎 廿一
茶花（ラミヘシ） 廿八
藤袴 卅四
角觝（スマヒ）草
曼珠沙花
茗荷花
摂待 十五
送火
妙法火
養父入
捐葉 廿
木槿 廿四
萩 廿九
芭蕉
仙翁花 三五
灸花
刀豆
躍
盆過 十八
舟形火
一葉
鼠尾草
草花 廿五
蕎 卅二
旋覆花（ヲクルマ）
菜師草
子日紅
瓢

絲瓜 卅六
蓮実花
秋蛍 三十八
虫送 四十
轡虫
蚣蟠（コホロギ） 四十五
虫籠 四十六
蓼虫
鳩吹
小鷹
扇置
西瓜
秋坂
秋蝶
虫 四十一
蠡斯（ハタオリ）
竈虫（イトヾ）
墻螂
稲虫
狗鷹
荒鷹
捲園扇
蕃椒
秋蝿 卅七
蜩
松虫 四十二
蟋蟀 四十三
箕虫鳴
虫籠（イナゴ）
屁ひり虫
附公鷹
鷹打
霧 四十八
木瓜実
秋蝶
蜻蛉 三十九
鈴虫
栗立虫 四十四
虫賣
藻鳴虫
蚯蚓鳴
鷹山別 四十七
残暑
霧 五十三

稻妻 五十四　物荒 五十六　秋風 五十七　秋田姫 六十
相撲 六十一　花火 六十二　不知火
秋々中
八月 六三　萬月　竹妻　八朔
田面 六十四　八朔掛　絵行器　宰府集
異彼集　狩月　二日月　三日月
夕月 六十五　待宵　待宵雨 六十六　名月 六十七
今日月 七十　新月 七十二　月今宵　名月雨 七十三
閏名月雨 七十四　雨月　十六夜 七十五　既望雨
宵闇 七十六　宵明月　立待月　臥待月
月 七十七　秋月 八十　月見 八十二　月秋 八十三

稻花 八十四　稻　早稻　晩稻
稻刈　落穂 八十五　毛見　稻舟
稻莚　青莚　稻垣　燒米
新米　田守　棗 八十六　木犀花
芙蓉　檀特花　紫苑　風仙花 八十七
鶉臥花　鴈来紅　鬼灯　縷石菓
白粉花 八十八　秋海棠　鞠上戸　獨活実
蓼花　蓼穂　花虫　薄 八十九
花薄 九十二　尾花 九十三　芒散　雀麦
藍花 九十四　露菓　歸菊　若烟菓 九十五
蝶菓花　牛房花　水引花　蕎

蒭
秋茄子
同引菜
黍
新蕎麦
狗汐
放生会
擣衣 百一
引板
坐(ウツサム)寒 百六
夜寒 百七
烏瓜
芋
芥子芽
蜀黍 九十七
菓堀
生分 九十八
豹牽 百
桑山子 百三
添水
肌寒
露寒 百八
葡萄 九十六
零餘子(ヌカゴ)
粟
蕎麦花
蕎根堀
二百十日 九十九
豹追
鳴子 百四
焼帛
漸寒
秋寒
冬瓜
芭蕉花
粟刈
蕎麦刈
木賊刈
後彼岸
出代
冬却(オドシ) 百五
落水
粗寒
下冷

冷
長夜 百十
鴨 百十二
狗雁
炙冬 百十七
小雀
類白
啄木冬
鰍(ハンゴ)
鰤
落鮎
分入
秋寒 百十一
蒸鴨 百十三
雁 百十四
採冬
山雀
類赤
鵯
沙魚釣
鱚
蒲藥
秋日 百九
秋鶏
稲負冬
菱喰 百十六
鵯(ヒヨトリ)
四十雀
鶺鴒
鶏子熟 百十九
江鮭
小鰯曳 百二十
蛇入穴
秋夜
鶉
稲雀
小冬後
隈隠冬
鶉 百十八
菊戴
古刀魚
狗鮭
洗鮎
廉 百廿一

廉菌 百廿四

秋之下

九月 百廿五　長月　重陽　菊酒 百廿六
栗花句　後雛　菊合　菓 百廿七
菓蒸錦 百卅一　十日菊　物名草　紅葉 百卅三
萬名草 百卅五　櫛名草　柞名草　櫨名草
白膠木名草　漆名草　合歡名草　樹名草
猶名草　菓名草　菓名草且發　不變名松
銀杏 百卅六　埋山鉢　來枯　升市 百卅七
后月 百卅八　十三夜 百卅九　豆名月 百四十　月名鉢
星月夜　雨ー迂夜　秋草　牛草 百四十一

埋之夜別　九月蝟　蝟谷　新酒
今年酒　濁酒　溫酒　木綿
栗 百四十一　團栗　椎　樹
熟樹 百四十三　洗樹　蜜柑　九年母
令柑　柚　柚味噌　柘榴 百四十四
槇(クワリン)櫨實　梨子　柿　板實
桂實　菩提子　菓蔓　南天實
山椒　木實　梅蠟 百四十五　常山實
菓實　牡丹根分　葱菓　鉢膽
思菓　万年青　吾亦(ワレモカウ)花　芦花
芦穗 百四十六　菓生姜　豆引　鞘豆

松露　松茸　紅茸　羊肚菜（イクチ）
物茸　雲被（カブリ）　馬糞茸　榎茸
毒茸　菌狩　尾越鴨　百五十七　物鴨
雀成蛤　苗葉鮒　綱代木　雲踏麻
穴惑　露雲　露時雨　秋雲　百四十八
秋雨　秋時雨　百五十九　秋夕　百五十　秋雲　百五十二
秋雲　秋山　百五十三　秋雲　百五十四　秋海
秋浦　秋川　秋風　秋田　百五十五
冬近　行秋　暮秋　百五十六　待雲　百五十七
秋名殘　九月雨　冬隣　秋雜　百五十八
秋同緑絶

立 15-3

能諧發句題叢秋上

椿丘太節輯

文　月　夏々月やいつ尺そくへん夜の雲　葛三
家ちらき石河まるる文月水　保吉
文月や凍ぬるもをしき硯筆　眞々
文月のかけや雨の中ありり　麦楽
文月や先雲とはむ嚔ゝ　道彦
文月や人の中なる天の河　寒松
文月や雨ハとちをむいてゐる　浪雲　天来
立　秋　二三尺立蛾尺なり　蓑古
てる旬や家に蛾たつ打れあり　芝村

雄立や月湯長しき施業法　公
高買の小笠に雄の立日和　白雄
雄立やいまるとかゝる乾机のあり　岱吉
雄立日つゝひそめる第九　保吉
雄立や藪ひ桃の夏のうして　又明
さらくと雄立新の木城和　諸昌
ちめくや雄立井のぬれ雀　士朝
雄立や蓮の素買の池めぐり　公
出まるるや秋立朝の小商人　恒丸
此年れそれも秋ハ立といふ　公
ひよひとるつ雄や木槿の花の光　桂又

ほつちりと服に雄末ぬや雀　樗堂
ぬれ扇頭の月に雄ハ立にけり　米英
雄立や芦辺をさしてゆく雀　可都里
雄立や樹しろうなる服と汁　東鏡
馬ふきまるより雄ハ立にけり　冥々
雄立や赤いかさしの尾笠に　大阜
番に漁雄立道の尾とりや　自化
聖の美なりし雄さん秋のうち　道堯
雄立て二時ちり自頭和　岳輪
雄立や白戸明れハ柳の東　長高
雄立や松の下なゝ戸口ふて　樓堂

夫の者のんだよりも蛸立ぬ　亜淡
蛸立や氣を捨し蟬の声　魯隠
立蛸のすしかれとて虹も杉手　蒼虬
蛸立てうるく扱ふ類かれ　三津人
余氣なきゆや蛸立井の穴　卓池
秋立やれさしおれは新の松　女志宇
秋立や米虫の羽の殘れし　紀伊　萍左
古蛸のかふ云ふ祝へ芒著　雛啄
よれ入る四ツ文花より蛸たちね　陸奥　可合
心里や蕊蘇の葉も蛸の立　阿量
ひとおしるたちの秋立て　出羽　有鑄

まいらせに蛸立ましる蒲かれ　素撲
蛸たつそいそけ小塚の夫の運れ　紀伊　梅調
うつそしき夜におてや蛸の立　陸奥　松鳴
あつて人の葉嘗ぬ今朝の蛸　柳荒
鷺一羽立て見きりかさの蛸　合
奚立に追つれかりけさの秋　蕪村
市中や御見さるめんけさの秋　鳥碌
けさの蛸死しと寄し人に逢　晩壺
鶯の涙芽かれやけさの蛸　合
晩の神鳴時てけさの秋　几董
今朝蛸としらそいまく男　小　戸　存義

去用より葦喰てけさの秋　青蘿
学を末をけさ秋立と人のいふ　白槌
秋ハ来ぬ家むす蘿と葦に　涼鉞
葦の動き初かりけさの蛾　梅人
こゝハ家にむすれし葦かさの秋　岱青
故の足も大車にふむやかさの蛾　大江丸
ひとり居ハ仏ゆゑたすかさの蛾　柳荘
かさの蛾良も洗ひ手出りかり　樗堂
鼻かみ在耳のふるかるけさの蛾　朱負
故居ひ人和ハ蘿喰けさの秋　可都里
羽をたゞれ乙鳥も高しけさの蛾　屠蘇

おもふまも過てすしやけさの蛾　道彦
嚔して塀から出るりけさの秋　董堂
何なりと市にかはやかさの蛾　蒼虬
松つまし おれもするやかさの秋　等老
おとろへや足の元よりかさの蛾　羅風
晴しやとおれもしたりかさの秋　三津人
何事なぞ人の来にかりかさの蛾　亜濱
晴しさを謹まもいそれかさの秋　快臺
蘿なりと志る人にさんかさの蛾　何丸
相柳なぞ星もなしけさの秋　白考
藥餌のうしら美へぬかさの蛾　女志宇

来秋

来し良のなりも見られたるの雄　陸奥　学疏
ふふ雄と出て見るんにとりかり　伊賀　閑竹
掃てゐる木のもとに見てたるの秋　女抱　詠
竹の上から雄の来りかり　陸石
鶴の方に秋ハ来にかり汁の味　甫尺
来る雄の来もをれ鶴と持れかり　樗堂
来る雄に立やとり遠ふ鶴戸ハ　月居
来る雄や志るしき晴きつ　蒼虬
そこへ雄の来るやに鳴鳥ハ　塊蔵
熊笹のつりから秋の来にかる鶴　柑翠
汁の目もすいと逐りて来秋鶴　枝長

初秋

初雄や腮さけり　生者　晩壽
初秋や汗笠かけし　来人　白雄
初雄やよその火見ゆる雪の屋と　蕪村
いそうゐと秋に来たるんかれ　保吉
初秋のそらくこと二百二十日ハ　袋吉
初秋のうふよりいそくかれ　仝
月のそこ見て来の鳥の初ハ　又昭
初秋の川瀬にたてる小笹ハ　士頭
初秋の麻につれたる蓮かれ　仝
うゝよ出る月を初秋のかいつつり　仝
初秋の老母学にうるまゐ　恒丸

末の霧うつくに秋をはしめけり　仝
ゑつまんとして初秋のかゝるる　樗堂
初秋や蕎の折着ちさりれ　蘇里
ちつ娘をむかへかしきこ家れ　女句柳
こ里にはしめれ秋ハたりけり　道彦
初秋の来ても月なきまこれ　岳輔
初秋の簾おにしたり蓮の宮　寿渕
初秋に出れたりし　旦れ　魯隠
初秋にとりつかれ　寒のきれ　鞠風
方雲を動かれ秋のはしめれ　蓮風
初秋れ雲にぶのふの見ゆるれ　鶯笠

七

初秋れ夜ふも見えて雲に鳥　菱亭
世の人の初秋見ゆる関家れ　長高
初秋を見に出る良の小麻れ　漫々
初秋や雪のふりむく笠塩　豪こ
初秋のけるかに風まぬ夜の雲　柑翠
初秋や山の風情のかゝるる　白戸　諫園
秋めくや二百夜に入る松の風　月松
木の股に初秋れ旬たまりけり　子崖
学の戸や内て捨れて娘にする　出朋　崟柳
井とりか出隊ゐるとんぬすり　晩壹
七夕や桂に寄ハ月落し　白雄

七夕や大ぶれ氣の産の松　希言
七夕やまゝ花てある産ゆらし　芳之
七夕の夏結ふ事や嫁ふるつ　完来
七夕や夢れハ花も咲ぬりに　三顧
七夕に閑のひろゆる名ハ沢　乙二
氣意の父母幸しまるの夜　鶯老
七夕や所生て見る丹の月　鶯笠
七夕やあらに後ハ人の上　亜濱
七夕の家に愛ある産ゆれ　布摩
七夕やゆとゆるれと夜の松　建松
ありくとも七夕見えて光ゆれ　久藏

七夕やこれかいたくく松の家　稲雪
あふ夜とてゆきて星の光ゆれ　樗丸
明あき舞つゆん星一夜　蓑古
星と夜夢見て望む人あらん　晩蓑
笠状星に夜の忍なるべし　仝
人月の垣ハさあく星の意　保吉
意すてふ星ハ四角まもるゆり　大江丸
星合に老夜ハよぶ名ゆり　麦鴻
兄弟ゆ笠あらそひや星　士鈴
大鑑や夜河をまゝる星の妻　仝
星の夜に寝ふ事のたまん一首切　恒丸

星ふるつむかれ合て動かなり　菩薩
星合や雲さん雲のさきなら寸　沙羅
星合や新とる事に人の老　羅里
星かけやと雪れた鳴け鶉　一草
心しそ月もすべく星と雪　道堯
日ふりしはよかなり星と雪　仝
秋の夜星は西ふに遠るし　養虬
坂きさん星台の間にとゝ年そ　月花
尻しさうやさもるきつの糸芒　乙二
そのかの星も見られて更にかり　月化
星すうや亀もすしい後つき　一葉

星の夜いさとて月や入まふ　長寿
よろうの色にゆるれや星一夜　魯隠
ふるまきて七草ほ人星の夜　志宇
花の色を雲にちらけて星と雪　平尚
二ッ星白の濡れかる　すん　そ　幽嘯
鶉の巣まもうつれや星の乳　其明
牛捨て在にれしたを二ッ星　桜関
星の夜やさやさに蘇芒　諸陽
哉さに雨流さん星むかれ　晩臺
星迄夕暮ならね有もなし　柳荘
ふんどしに蓮寒さして星迄　一葉

定めれきせとそれたし星迄　陸奥　朴高
星　秋　星の秋捉事れ迄事も咲　まふ　菅三
星　宮　打事のあるうしらゐと星の宮　孤山
翁　星　翁星ハ未それて見ゆるれ　焼表
まるてこの夏ともなれ翁星　陸奥　掬明
世をなのむかけそこれ翁星　猶之
宮とまりゐとなり星のあれ　松江
天川　松原へ落迄青や天の河　江戸　川悪
秋すし松にかりし天の河　蓑古
清るその半宮にあり銀河　左明
雲くに別しその夜天の河　白雄

題義秋

天の河星より上に見ゆるれ　仝
秋の夜を押出したり天の河　袋吉
おてす夜の星の河や天の河　保吉
天の河見ゆ庄森頃もゐにかり　隆石
秋まして日ハ暮にかり天の河　恒丸
天の河飛越すほとに見ゆるれ　士鈞
あるひに萬もりゝ天の河　仝
海人に酒ふる星にん天の河　希言
さむしろや飯ふふ上の天の河　樗堂
のつと出るれ雲かしや天の河　仝
流合ふ星河の末や天の河　女星布

塚の花ゆゑりもあらんてこの河　一学
てのの度いまゝかおりまゝり　大阜
蓮生の事よりしてこの河　岳輔
秋の夜のさや長くと訳　河　菱亭
塩ゆけハ豊にあらうてのの河　桂堂
てのの雄一すちの夜のうしき　雄剛
清さう風そのひさしきてこの河　蕉雨
出あるけハまゝ夜えてのの河　雲雄
一筋のものに限る雄てのの河　亜濱
天のの蕣の蕣に志らけたり　魯隠
雄の夜の河しつかりえてのの川　呉老

恐ましや非にへたるてのの河　甲斐　漢甫
心里や松のあけれのてのの河　筑後　双鳥
見ますまでそして森沢のてのの河　左文
松風の音ハ遥流かてのの川　其宋
家学にあらうさすえてのの河　下総　鱗々
鳥鵲橋　かさゝぎれ橋もなく夜のかけ流し　員隠　楚流
かさゝぎれ乱て星の八日水　上野　成醇
このさゝぎや橋と呼ぶもたしまし　伊豫　去嶋
願　糸　窓さまく雅の糸も白すより　英才
すしさや雅の糸の吹るまる　乙二
さう風や白糸の外に雅ひさ　寒松

梶　葉　梶の葉を詩後集の槃和　芸術
梶の葉に居り寄る女文字　几董
梶の葉や三粒隠ても星の面　長翠
手ひくとて七夕に梶を出されたり　道彦
梶の葉や手のくらめく形に牽　寄閑
芋葉露　吹よきて月にあり白いもの露　武蔵　西羊
立　琴　立琴やひかは帆の数そはん　麦宇
たてことに蛮かすや星集る　丶　木奴
七夕鞠　おちかかれ雲にもわれたより傍　几董
高鞠や月ハ七日の暮すやミ　丶　可僚
池坊立花　坊の花月も有らんさし枝れ　陸奥　一玉

逆峯入　峯入や思ふこしめる蒼花葉　梨澁
夢売夷　明日かゝれ商ひとけん夢売うり　硯布
世の中のはしたきの人夢かゝる夷　蒼馬
草市　草市や人の身にたく朝の雲　完来
草に市気　草に市気ひかりかり　寄閑
利　錆　さしさばの仏ふきも気なり　武鈴
匠　漣　ひに居る馬迄まへやむかれかる　政二
あれ月を左衛門にそ匠かね　一葉
匠　火　匠火や父の姉母の良　白雄
神や霞ふ旬の匠火ひとさるハ　合
匠火ハ門はくまでの光かれ　保吉

霊待

魂送

霊祭

送火はさひしさの九月哉　春亜

送火や素顔に家は子なきて　道彦

送火にきえてつれのはつれ哉　一茶

さわくと約火のまてそきえ家　蹄こ

送火もころあのしや浦の名　義秀

これにきえ更くるへしは子の声　自旋

魂約や椎さく月夜の宿の簾　仝

霊送約にのこる家人や　仝

霊送きえは涙へやそそかし　蒼之

霊棚や白髪を拵へ猫の上　鳥醸

あちらかれや故状の前に送霊祭　巣市

霊棚を片付ハあとの空哉　仝

月見ハ人の良しも霊祭　蒼古

霊棚は子の父の膳かれ　暁臺

霊祭家の情もまくれる　自旋

霊棚や灯をはかへ子の親　凉袋

霊棚や此子を招く乾涸　保吉

霊棚の親は兄まり浮る　几董

ひとつ灯もあかれハこそ霊祭　似化

あちらかれの白き南瓜や霊祭　又明

霊棚やとう来るも子は寄　大江丸

よろ夜の蜂しくもあり霊祭　柳荘

盆

魂棚や蓮にのつた小きうり　丈左
魂棚のうへ机にしら人草烟　米英
折しらんて気しりかり魂祭　可紅星
夜月をなそくれしらけぬ魂祭　佐渡 懐帝
まつられぬ蜻蛉のまれて魂祭　定雅
桃栗のことはなやし魂祭　雲讃
玉棚や上坐して明がらす　一菜
魂の坐は家ハ表をのこれり　鴬笠
聖霊の森路を送る月　ヽ　文路
花蓮は夢からけるたま祭　女 濱藤
涛士らすや門へむかへても盆　角　暁甚

盆ん身をけれさるまゝね　公
名にをし散りつゝし盆　ん　白燒
さくもちとさるちりや盆見え　道光
人形て花八いと　盆の〻　亘
よりとあね盆の味や宗匠教王　為暁
盆の折も見えて萩より数條し　浪花 蜂戈
満庭す空や一方れかりし　盆　安房 守明
宿の亭れりとしりと盆の下話　近江 化李

于蘭盆

うら盆や柳延たる手の讃　其こ
うらはんやさらかにさとろく路　儀治

棚経

棚経のあとやてらふ家の声　鴬笠

墓

余　うき身の先着る余や墓参　完来
大義を歩ほしてけり墓参　嵩之
子どもよる菊や墓参　護物
何事に道きかりそ墓参　素由
これやこの息折ふしも墓参　長老
人の親の家をきくらりける墓参　又有庵
いつとても松へまきしや墓参　二蹊

河内　非圃

瓜
馬　垂跡も世の道具なり瓜の馬　寛松
真菰　馬　孫来やすこしのうちも菰の馬　護物
蓮　飯　炮魚の塩てあれなり蓮の飯　自得

麻木箸　気也や麻木の折しの長さし　也足
ぬれて後く月や風の夜麻木箸　保吉
折　箸　はらくと見ぬやる折箸　暁巷
折箸やまを見したる風の音　覚之
子手迹の折箸にてまするか　自得
折箸に樹のある見る夜か　保吉
老鶯木にかけても窺ふる折箸　諸昌
折箸の池かるし板か　士鈞
万家のよそね枕そ折箸　一瓢
一夜ささてまれもとよや折箸　米英
大かるさの名あけりる折箸　蒼朮

切籠

うき風かれ人の気にかゝり船灯籠　菁二

ゆりうごく灯籠あげて松の白　萎ゝ

灯籠の数ひくゝなりて更にけり　白塘

寺の名をよ講も実のともし火　久臧

灯籠かけし松は流しきえしめ月　筑後　其棠

影うつる岩より底して消にけり　三河　楳老

盆ともならぬ人の面影の家　周陽　子濱

高灯籠関月まてはなれけり　文麗

壱から尾の切籠かけたりやの秋　箕ゝ坊

緑多おれ法師たぐなりてかな　么

吹かれては天は乙女のかゞりかな　能登　司鐃

桔梗

白骨になりてところや萩の露　完来

桔梗はまちまちに枝折れて雨へり　蕉雨

桔梗の葉はかぎとる葉の風　几董

桔梗や礎無し角力え　不明

せつないの紅葉の露鶉かな　護向

鶉

つくの関からふるまりかな　智勝

桔梗は切て出れば出てや鶉かな　暁台

まとりなは鶉落して遠ほり　么

ふりつけは吹きもたせ鶉かな　么

姥見ん人まつれはくまりかな　篤古

草はまたかれ鳴かくてまよりかな　蕪村

きとる夜を月都なる海まれ　白槌
ある人のまゝれて入しきとりに　仝
いつぞやこれハ理子松のうけ　岱志
見てとゞける人の心も理に　美菜
きとる手に食の通る浮世に　仏紀
仮初に きとりかゝり夜来の月　大江丸
殆りあるまゝそ見ぬきとりに　仝
ありの心のつれなく見ゆるきとりに　梅人
町ゆくる沼へ出れきとりに　祐昌
人に親の案内よりのそく理に　袁隣
きとる夜の心ハ風の先　梅廬

口戸

きとり垂てしきりちらく来きとり　紫英
抜かきぬ子に河ありぼん理　年仙
青既ハ案沼に来かり大理　長高
きとり子の手のきとりハ年よく之　月紀
村白やきとり年れて夜の白　普源
汝風の時白こんなるきとりに　雲槌
満月やきとり関ゆる井の月　二津人
菜の海者と見る人のある理に　万和
盆きとりあとそ松風出の夜　素月
惣きとり昌かゝぬハかりかり　小理人
拮抜きとり接子きとりてきとりに　久臧

尼

生月亮

きとる夜やかそこの子も人の秋　九朴
きとる月夜樗越ることしらさりし　松江
きとり子は思木原ふきそ見れ　李尺
躍子の目まもつ明の如ひ也　古梁
心里ハ芒にさはるきとりは　[illegible]　明白雄
きとる夜も宛初ハひりふるりは　石凡　露月
きとり子やこれ栗桿の丈ゝ人　左節
かそて有れ氣も古以の亮の数　晩雲
うゝ氣に逢くまつる生亮そ　白雄
子ゝまも人をさとまや生月亮　美葉
古以そ見れまもかけの亮まつれ　丈左

盈月

淵川に掉とる子あり生月亮　雄兎
見しや月れ升るる亮の人　晩雲
古へるに辛子さぬかり亮の月　白雄
亮の月秋よりいても辛かたゝね　大江丸
学深き里ハ過よし亮の月　琪道
あそれむかへて来たり亮の月　士鈞
人の身ハはそりゝ亮の月　[illegible]里
人をしにつけてぬるや亮の月　合
いとれこもおのふの海や亮の月　[illegible]
その月家くそのを相すてする　一学
死殘る人の多さた亮の月　岳韜

京形史　京の史の消ゆくるや雪の海　不知作者
地蔵集　化粧して地蔵集や京の辻　ロテ　寒玉
衝突入　つと入や志る人に逢ふ松子ぬけ　蕪村
頓入て星一に誰とさられけり　几董
養父入　青花に鼻呼ぬるゆ蔵入れ　表丁
一葉　暖の青ぶ中より一葉れ　蕪吉
謹の蔵く相の一葉れつ　白雄
見るる眼に嵐の相の一葉れ　今
相一葉柳を上り落まけり　岱青
秋もさや相の葉まるく人の門　保吉
見をさや又一葉くの蔵の秋　斗入

葬の戸へ指れ入けり相一葉　土鈴
父蔵を押さまし落る一葉れ　玉篁
落て浮風さまくん相一葉　午小
これ見よといふ蔵さりれ一葉れ　一瓢
蔵の戸に手の出雲んより一葉　長高
辰ちゃん得良の夜葉れ　秋長
鶯の地にかり初やおり一夜　一蕙
相の木やちるとは百をまつやうに　信丸
分かれありさうにちる一葉れ　因幡　無関
うちそよき柳ちりかる葬の雅　関更
柳ちるやすこし夕のはのよはり　曉意

楸散

いそかしや拾ひもしてちる柳　蓮之

行きれあらはしら手ちる柳　保古

葉散る一節の庭つれより　駿河 蓮々身

手のまのさし木れ散葉より　樗雪

嵐とも蕣れ来つし散ちる　竹葉

葉散る音も種まきの月ぬより　道意

ちる散る橋の白氷の光るなり　嵐舟

鶺鴒の飛るも忘れてちる梧　月麦

毎日の曲りけてもちる散る　播磨 未徹

村白の夜もまれありてちる楸　護物

紗豆の夜まもろう手ちる楸　鵞之

橘散

嵐尾子

まつれまかれ数うちるや豆腐桶　一葉

みてまかや才にうらさる穿みし　暁台

こそまかの庭の折れしはれなり　伊勢 杜乾

みてまかや容れとなりし母の袖　袁丁

みつまかれ花のまくとも一つこ皆　且々

こそはかや流れつちれハ風の吹　一葉

みそはかや田あ本実りて鳩啼る　出羽 渭虹

みつまかや影ハ余男の跳千鳩　可丸

枯枝

枯枝花咲時はれと云まし風　女 千代

雨二ともるるね枯枝の巻ふ　伊豫 随支

枯枝さくといつれも花のいそかしや　暁台

蕣

すしさや桔梗の蕣のこほるしハ　蕣　左
花桔梗名のこの色を咲れけり　樗　良
ぬりくしゆたとしてさく桔梗か　一　葉
ふくらかに桔梗のやうれ子れほしき　女　濱　藻
花桔梗ありたけ咲てしまれけり　白　梅　手
桔梗ひらさるゝ出しけり　甲斐　物　紫
白桔梗雖ほか垣に咲れけり　尚　山
朝良や雖に染ても強かゝす　也　里
蕣や人も日にくに同しす　荒　江　桟
朝良に釣瓶とられて囉れあ　女　子　代
朝良やさとれくと咲かけり　鳥　酔

題叢秋

朝良やくま桟のはしの蕣をとつ　蕣　お
朝良の花ちれさらそなりまゐる　百　泊
朝良にあふれき梅の鶯古か　樗　良
蕣や秋ハ朝から花なり　蕣　左
朝良やあめて二輪の友ちから　曉　雲
芭蕉風ゑて蕣の葉か　仝
蕣や蕣にをしの実を結ふ　白　雄
朝ハ年の蕣の花もあるらき　仝
朝良やおされき是に蕣の詩　几　董
蕣やさもこれ見る人ハなし　秋　瓜
朝良の花の上すもあらしかれ　陰　石

牧良に寄する月の二百韻　保吉
あさ庭ハ昨日の月に明るゝ　自樂
笑にけり牧良の花ハ夜にけり　又明
牧良の井に火をうつ伏家か　恒丸
高やくと蕣のさく垣根か　士鈞
いゝ庭の世を牧良の松の枝　仝
蕣のしましを面にうゝれけり　又篁
蕣をとり唐けるゝ小屋か　桂又
牽牛花のひゝめてたし花の上　樗堂
家葬の牧良ハ牧もまゝ如し　仝
牧良やこ牧ハいつれに的拭ん　菓兆

牧良のひゝかゝおのふに米にけり　米英
あさ庭のさやこの秋を咲へられ　仝
牧良に仏法おの陳笠かれ　完来
蕣やひつくの花　雲　嘉里
牧良のうつり人牧人も楽す　仝
蕣のゝや面の洗ひ箸　蔦三
牧良の花のこまも雲かれ　一学
牧良やはさ八月十又日　乙二
牧良に野のりゝんをてあるとそ　道彦
牧良の立とまゝる人を日かけか　尺笑
分おもなく蕣を見て居たり　仝

蕣の蕾より出る朝日は　月花
朝良やさかれは夏をいつこまで　合
蕣や塊もからぬ学の有　素藥
蕣やまゝ花鋏して花の咲　合
朝風く朝良をとく咲にけり　岳輅
朝良にもとりしき世こ家にけり　合
朝良の咲し今酒の異見ほど　一飄
朝良やかりるたる夏の上　長高
蕣の長果に咲る御家かれ　寛松
朝良のかけに分をおく住居は　橘屯
樸や花一倍の人の皺　一葉

朝良の花のあるかれ日は　夏字
蕣をへたてる夏を読まれり　鞠風
迎すまし　この朝良の花　仏
幸の花なり見る蕣ハまりけり　少汝
朝良やひつ咲ても秋の花　嵐和
蕣やさかれと見る人の歌　芦渥
朝良にうけさつすはを花の香　鶯笠
蕣やひり流るゝ心の手　三津人
朝良やかふハ葉の中の花　護物
来かれの蕣それもほとけり　陽子
朝良もさかれあるしの垣ふれ　袁丁

物良と物くゝ語しき　万和
物良を咲きるまでに葬しか　業也
物良の花にも惜き料理か　卓池
葬やうにすり移るはまて　さく　巻浪
様も見る氣とはなりぬ　女　志宇
物良のゐれくゝ言ふ垣ふか　繁る
陳状をなく葬のはかけか　諸陽
物良に見るやおのふの家の頃　梅間
葬の物答まをて見たかれ　陳奥　不図
物良に追るとそのかくゝれ　能治　双鳥
物良に風にちらぬも氣之　双湖

物良や夜ハ夜ふれの学の風　尼　和海
物良の年に限て咲まなり　蘭家
様の定年ゝるも定りぬ　北尾
葬やさゝれおなする翌の物　仁徳　木鶴
物良の花に古の形こほれなり　菓壱
物良にむけても見るや計の穴　白戸　左民
葬ハおのふにこりに咲花そ　丶　吾嬬丸
心住や物良ほうの雲のはし　出羽　かより
物良や咲うき折もあるべきに　樹麿
物良や隣の外をあてにして　江鷲
物良ハ夜の中まで見ゆる之　幢平

木　搆

鶴良にて屋子や松の花　東　　道白　汲波
片時の鶴良に接へてしより　　一鳥
蕣や槽に秋のかれかつら　　日向　井堂
気さに折て持たり花むかけ　　樗良
花むかけたつ日のよやかすりたり　　白雄
めそ子の端に洗しきむかけ　　仝
やかの蕣来のつ屋子や花むかけ　　暁素
蕣言しりのさし入る白むかけ　　立
鶴良にうすきゆかりのむかけ　　芝村
る鷺君の吏姫住より花むかけ　　重厚
日ハ花の中よりそてむかけ　　又明

技持元のヒノロなるへて花むかけ　　祐昌
むしさくやなるよむかけに花一ツ　　士鶴
日短にかりかりたるむかけ　　仲公
牛うとそ見むかもなぬや花むかけ　　雪洞
ひつ咲て出つ見らるや白むかけ　　米英
云なるく見て過ぎり花むかけ　　万郡里
侍に代てやりたるむかけ　　仝
さしむかけ花のるめにうかりかり　　一学
ちりしも来ぬにもやちるむかけ　　道光
幸短き花とて見るぬむかけ　　長寿
うかくと出るに通しむかけ　　一葉

垣豆も咲に来てみるむ斤か　三津人
まれかまて花のさめるむ斤か　雲雄
有かさぬ家のつゝおて花むしけり　古彦
一辻の高ぬし良やむ斤　垣　豪心
垣そしに囀れつ呉つ出むし斤　女志々
雄といふ事かかれハむ斤さく　江戸　曲阿
むし斤咲や我濂体むしかけり　松江
奏る筆もはれくさめぬ出むし斤　武野　南井
呈ひつむ斤一輪学れ葬　但良
朱ゐれそさんてりそ出むし斤　江戸女　湖風
学れ花ふゝ辺ハ三風芒菜　存亜

草花

ひつふるつその和の名ハ学の花　仝
鶯の鳴日の沸しさに学れ出　士鈞
秋の学刈あとかうも花の咲　弗云
うるほれか花と来しか秋の学　広坊
学の花よしと君ふも屋のうち　以足
本舊のれまて鳴く学の花　万都里
学花に火のとゝかゝる垣ぬか　石燕
学花をたれ踏初て道ふるつ　蓑多
とりあつめても夕暮そ秋の学　寒松
大白の詠のは和や学のむ　漫々
学出の持て生れるは和か　一瓢

草花の栗ハ色まもつくらへし　由之
草此戸の花にすけるる佳花か　九朴
咲ハさく屋と草のちるも草此花　富蓑
手くにしらぬ花あり秋の草　老鶴
木のまるやちれされ草も花のさく　秤丈
あらましを咲まもあらず草此花　兎卿
はらくと見て接にけり草の花　下臨　菓明
兎角して一把に折ぬめらぬ　蓑村
ほ風をうつすて那里めら花　蓑左
あるか中に地河流るめらむ　白雄

女郎り花

人志れず蓑ハ色ぬめら花　岱吉
原中にあり今ら めら花　秋瓜
めら花花の口中も色にけり　蹄石
めら花出の乗ぬ夜もあり　斗入
めら花ハ月の洲し　さた
手折るに秋風たちぬめら花　大江丸
るらめしまた粉やこ屋れるんめらむ　存亜
塚の間やめら花ら めら花　冨急
蹄まれく咲日ハ見くすめら花　士鈞
めら花 超さるれぬ名之けり　仝
めら花 洲じまるに折 色し　道隣

めら花自のうらうらハ老ぬへし　　[illegible]里
めら花ふのある月の名ゐるゝ也　　一学
さひしさや雲の飛るめら花　　道堯
さる屋とに萩ともふさすめら花　　仝
自かけにありやうしやのめらふ　　魯隠
文字摺の字とり学やめらふ　　大阜
これをうたかれや恨んめらふ　　自居
門先や墨れ木のたけのめらふ　　[illegible]剛
与止ふや雲の喰ひ折るめらふ　　寛松
折ちらうらくて又折るめらふ　　雲雄
親里へゆくは短しめら花　　雄剛

り人の雑にたるれてめら花　　養圃
打ゐくとたつや嵐のめらふ　　鶯笠
何事のかゝりくそをこれて　　一葉
めらふいかれる周に咲和し　　護鶴
人の上にうるめられりめらふ　　卓池
めらふそのいひかけし花のさま　　葉也
蕚るゝる花のやうすやめら花　　文角
人かけの見ゆれハうこくめらふ　　梅岡
見るうらかな蕚学をめら花　　雷師
めら花そうずそ風に折あし　　鵞雲
たれハ打ゐるよれハ中にゆしめら花　　梅岡

茶

花

ゆら花 雪見ぬ人の松をかさせ　三斐
火白にそるひきゆるゆら花　江戸　拝言
ゆら花 風の松を 恨むれ　方文
そこまで小鳥松を見ゆら花　久藏
いつれ月に実まそるしそゆらぶ　下野　雄尾
折らそるる心老たりゆらぶ　榜廣
ゆら花むつしうるく咲にけり　兎所
周の夜の志にしちらや男へし　陽子
秋風に吹をれぬやう男へし　諸鳥
をとこてし世をのそくちりし　備後　藏六
男てしそる孤猶て咲にけり　長蕃

蕎

白まの雪まそるぬをとこて　紀お　叶第
木のはしの氣ホかさまを男て　下総　有月
鶏の引出に萩の下枝れ　周史
色見て萩ふりこゆる灯れ　暁意
白萩や雪一升に出一升　兼左
白蕎を去るちとるちとりれ　英才
もれあれて一枝うこく新の蕎　白雄
吹るや蕎の邪猿の後まで　京　桃江
蕎の花一もと手折 去され　百鳴
金雪もちらて凍にけり蕎の花　岱書
萩の雪秋の古月にけりけり　保吉

鳴出しおれに蕨尺の陽りかり　仝
下掃て並ましかり蕨の芯　秋瓜
蕨の目和にはりあはりかり　存亜
青くに前はかなりて蕨の目　斗入
咲初る頃より目あり蕨の芯　強道
蕨の芯門をたよりに咲ぬるか　乙図
白蕨や倚しう尺ゆる蜂のつら　恒丸
村旬下門のうちかて蕨の花　士鈴
現象てそのうく蕨のうメ　仝
心里や杉すもたくも蕨の芯　仝
まつ人は来て仕舞かり蕨の芯　柳荘

洗しの志なしは蕨にかれかり　桂又
蕨さく下囲炉裏のいぶる風か吹　栄兆
白蕨や徐ふはかりはくる　浪芯　支図
夜のよき雀かなくや蕨の芯　子鶴里
馬来て門とさぬや蕨の芯　仝
雑の蕨深雪を出て来るなり　完来
蕨の色ちらるはちれとおれかり　樗堂
聖ゑ蕨の白ふか蟻の来る　乙二
上野尺てもひろ沼に目と蕨　一学
尺さるゆる沼もなしや蕨の花　道壺
蕨のうメ里の余波もあらけし　仝

り人の行き手蘇の垣根に　蓑机
山の根の廣々も見ゆる蘇の花　岳鞘
むつくと折し蘇の月見に　椹里
隣の蘇の蘇の見頃と来たり　蓑今
蘇折や蘇の杖もいく酔もまで　冥々
氣とうろ蘇ちく屋の小蘇に　魯隠
蘇蘇や扇にすらは屋隣　平角
むらしめ〻蘇の花　少汝
翌と蘇に蘇は桂も咲ぬ人し　康古
蘇のむこてをまたけと咲にけり　一乗
蘇さらりさや鷹月の蘇之けり　学笠

四ちの月や亂もこ庄手蘇の花　雲雄
折てゆく蘇まもへるやうあり　仝
うら花の物並ばる里蘇かれ　寛松
るかりれするを物く蘇の花　三庄人
起とる蘇に小海老のこなれけり　仝
蘇の白灰ハ明るくて隠にけり　冥也
白蘇や蘇やうくハ赤ずより　女志宇
孩のるつ日ハるず蘇の墨かれ　太卯
忘れてそさらぬ灰もあり蘇のつ　松廉
蘇の花きるの鳴まもこなれけり　梅間
白蘇や蘇を上ふ蘇も花の数　伊勢　梅二

萩ふくや出してるくさむ流ののれ　東陽
日ゝ有と重嵐名のれ萩夜頃　女　貴々
蘇さゝやちれさゝ星の光出す　又光
萩ぬけ出河ゝるき　葬るり　越後　由勢岡
白萩に星のかるゝられ　真雄
片時をふれぬすりや重萩咲　下総　朱々
白の萩すゞれ中へ乱ゆり　心人
こちらにも戸をつけめされ萩の花　陸奥　海樂
ほゞくと萩折る人を伊人　丶　英二
の窟や鵜のりあ人萩のちる　古民
片照や人にふまゝて河原萩　佐渡　田心

題叢秋

萩

恨いふ人にをられつ蘇の花　茅丸
こほくことおのれも志る花萩の花　柳麿
沙ふる瀬の小蘇も咲にけり　越中　嵩平
西道の萩を起して通りけり　河内　古光
志つきを蘇にかけるとのし　和　伊勢　重渡
蘇の戸によりかりたる日ゝ　植丸
萩のすしさ又鶴良とちかれり　江戸女　ちゝ義
秋萩の風うつゝれて人を吹　樗良
曉の日和になりぬ　萩の青　蕉古
魚つりに刀さしけり萩の陰　周定
萩の葉やまいうちから枯し青　諫夏

晩や海人流れて萩の事　斗入
心ほとすむ事もなし萩の事　恒丸
これとても老ゆくそのそ萩の事　士鈞
江の根や菅りまの萩の事　仝
鬢の毛ハつめるばかれそ萩の事　稚慶
延ちかれ折　攪すんて萩の事　蓑虬
萩を乗る風才角もなりけり　月雨
森てなくやうな世のかの萩の事　長寿
おのれのこゝ事あるものの萩の事　陸奥　北溟
としくや陸川なるて萩の事　菱字
萩の事廉おれなけハ面白し　何頼

題叢秋

萩の事も破るし萩の事かれ　桐柄
一調子はしやとやるの萩の事　車池
り燈のてぎ泊や萩の事　筑海　朱鶴
萩の事人の立やとまりふまて　鴻中
はんふりとぬれてあるから萩の事　陸奥　柳女
めつしくまりふもひと萩の事　柳慶
鳴やむハ萩にとゝ萩の事　石尺　梨雲
萩の事草の心をそうれたり　古節
菜の売と菜まて菜の白れや　江戸　平砂
夜の菜ゑにかれてや花白し　菱村
らたのりメ狐の花しき楠を焼ん　仝

詩を作る事おもりらまれ公
らまれ身も果を破るに似たりけり
らまれ身に老も若手も揉笑れか
堪まる乳折人あるならの公
らまれ身や秋ハ閑さ人持られす
まさくと葉に古人の白ひか
らまの身や笑れハうゑき衣の花
心ちる所をうち生ん葉の公
公を切て葉を書ふ事かれ
松ありて外ありて葉の白か
らまの身や仏に あるを外あるを

後河 周竹
青蘿
白雄
蕉古
武藤 柳几
土詩
蕾朱
松兄
岳輅
桂堂
雪笠

題叢秋

らまの公迄つけハ金石人白ふ事
らまの身のあやかるを海の春
らまの身のうしろに面き所が
藤 猿 宮外の苗ともに蘇ちり生
秋葉ちる白ひ折ちり蘇猿
身ハふるゝ公ハあるとし蘇ちり生
芭蕉 芭蕉ちに落ちり角瓦
やれ芭蕉心ての屋とそのくさき
雪ノ雲て雪の流て芭蕉ハ
白屋に雪の春ゝ芭蕉ハ
深々迄て氣と引さく芭蕉ハ

玉屑
秋兌
鳴堂
蕾三
田雀丸
素槃
晩春
白雄
合
蝶夢
蕉古

風のかゝ花並に花に遊りけり　保吉
日向ありてかけありて花草に新し　丑治
そき残なきを面もつ日のこけ紙り　存亜
ちらくと紙書かるなきをきが　樗堂
琴笛の霞れにかけてそきをきが　旭丈
中にとるやそきをきのかけの鳴る時　甲斐　亜梁
旋覆花　旋覆やむかし御寺のありし頃　尾張　羽墨
きてそれ風のうれや故郷の鼓　傍谷　蕉六
犬子　学　ぬ手人も秋にはたゝく恋のこ学　米英
春風れつ月のおもしろや恋のこ学　江戸女　ちさ
角紙　学　烟から投出されけり子まれ学　駿河　左遊

仙翁花　秋の日を京長に咲や仙翁花　美濃　七角
菜師学　瑞瑞色に咲きてしかれ菜師学　紀州　李濱
翁　学　翁学二百十日もつゝかうし　蕉雨
曼珠沙花　松明の黄捨もありすん書さけ　江戸　可慶
冬　花　やいと花子ともの花ゆり捨れけり　常陸　斗周
子日　子日子学につよよ名ゝけり　江戸　泰國
蓋母学　月なしぶや夜たゝきの君る恵の前　紀州　清淇
蓋帯花　忘てそ花咲きるめうかが　丑治
那の月に親もたちしそ花めうか　近江　梅園
刀　豆　ちゝ豆や七日八日の月の秋　駿河　里仙
瓢　人の世に尾をすへるる瓢かれ　蕉村

皆人の王恵者たるふんべが　青竹
ひりまてひりうりたる瓢が　凡董
うかくとまるのあるふんべが　蔓古
あれうくそれをみてふんべが　巴蔓
汗龐周て久しきふんべが　士詩
松風中意を忘せし瓢汁　恒丸
氣捷てこれ宗にいらぬ瓢が　敏彦
これひつ氣ひらしん種ふんべ　冥々
瓢よく寒の心をいたまり　蔓松
挽やすな物おしふんべかれ　小生人
痩るのふんをかいて遊りかり　陶笠

絲瓜　西瓜　蕃椒

ふつろひて集るまも如くり種瓢
は入て瓢先ふ垣根かれ　鬼泪
関のきに岸のくみかる糸瓜が　菓兆
屢斗むすふ蔓も残して西瓜が　宗陽
白いとて西瓜に科ハるかりかり　瓜坊
鞦韆に西瓜ひつやきとりる　是彦
頃球の楽瓜おそ居りし　蔓古
詩木をたてあ垣ゆや屋かし　蔓本
つれに見ぬ貞きとれたり屋かし　大江丸
六月れ旬れ之かり屋かし　華泊
これさんもへりりけれ屋かし　紫蔓

題叢秋

等信もひろハまいれ庵かゝし　仝
一度ハあるゝる色々庵かゝし　完来
庵かゝし鶉鳴おのゝのうつす　道意
老ゆれハ吝くるゝの庵かゝし　護雨
庵かゝし喰ふて寝るゝ　菓静
鬼ゆゝすれし草の庵かゝし　江戸　嵐春
おのゝ草に於る日ハいつゝ庵かゝし　紀州　五英
木瓜実　木瓜の実やとられまして計の中　薩ヶ　斐文
蓮実飛　蓮の実の飛や眠きる氣をうつ　丈左
うぼ玉の夜や蓮のこれ名此音　尾張　路郭
秋坂　祈ちる日に男の秋を鳴坂や　保吉

秋の坂のきまりしてあるもなし　大江丸
坂のかれ叢紫をとりまくれ　長翠
秋のかの足ふてかれありけり　喜長
秋坂もいまし黍に風かふと　紫英
秋のかれ焼に来て喰ひけり　丈左
草のかれ乾きつ秋と紫にけり　武蔵　秋耳
秋のかれ名のうへや坂弓　摺　極関
秋　蝿　掃そこれに少ろうりぬ秋の蝿　蓑舟
秋　蝶　秋の蝶日のあるうちに消失る　暁雲
そふこれハやりめにうりぬ坂の蝶　蓑左
坂の蝶いかゝる花を夜の前　青蘿

秋にありて蟬ハ春のしと覚えたり　春亜
蛾の蟬ハ有し木蔭をすのふ　士鈞
秋の蟬ハ今ハ如ふに花ひ蔭　丈左
あり青に鳴風雅あり蛾の蟬　白飛
秋の蟬三ツ重れハ落る　乙　午心
蛾の蟬友ちかれハや人に使く　可雅里
秋の蟬葉の花にとまりたり　平角
蛾滅し蟬ハ今のいそん庶もやうに　飛鳥　政舊
道ぶくやすのふもてうに秋の蟬　寒松
揚んて見て学に郎すや秋の蟬　竟桃
秋の蟬花ある学の中を飛　秋左

○卅七

題叢秋

鳴ぬ庭に秋にまゐるに蟬に　古老
木のをとも見えて落るや秋の蟬　久臧
蛤のしほに吹れる蛾の蟬　京　糸徑
秋の蛍大なる人の家に居る　完来
蛾の蛍鳴ぬ庭いかれる学の雲　玉屑
秋の蟬蛍より来れまうよりたる　岡更
蛾の蟬通る日を鳴る　水　樗良
ふるつ居てひつハ鳴手蛾の蟬　存亜
よの枝そかふまてをしむ秋の蟬　女きく
稿書をかけてさかし蟬に居り　桂又
秋の蟬打のれを殺する　午心

蜩

蟬の聲のひゝへハ秋に見えたり
きけハとて親うしなうし娘の蟬
ほとゝて菓のまゝもさほるや娘の蟬
身のほとゝハしらぬあり秋の蟬　河内
蜩やつゝチに落る蘆もあり
蜩やあるぞ秋に鳴うつり
蜩のなけハつゝかくたいなりしへ
日ぐらしや蟬をもれる娘のあり
夏四十日ぐらしのあり再んたつ
ひぐらしの鳴れるしかりかりし
ひぐらしの鳴ぬ来あるる娘哉

冥々　瓜坊
雪三　菊光
柳花　晩意
仝　蓮左
白雄　天鳴
恒丸

蛙

題叢秋

ひぐらしもうゝすなりたるゝ水
ひぐらしや松蓋の洗むかの上
ひぐらしのひぐらしなるゝ
ひぐらしやつれに花迄むかの松
ひぐらしや海すゝし尺ゆるゝ木原
秋の蟬そのかぐらしに鳴れなり
蛙蛙や花ろうに抗れ上ゝ鳴れ
日ハ斜閑ひの陰に蛙蛙水
蛙蛙や身をも焦さす鳴もきれ
うつくしき丸日向押へて蛙蛙水
蛙蛙や俗ゝ時も覚て花る

長暮　菓花
自化　雪雄
寛松　卓池
柳花　蓮歩
雪蘇　蓮左
百明

秋の季花未 蛙蛇に立くぬ　白雄
蛙蛇に浴の夏草乱るゝ　仝
蛙蛇や左右の目ぬれ萩花　岱圭
蛙蛇や頭に生れて羽の落き　又門
蛙蛇の十はかり泣く枯枝に　士詞
蛙蛇のあたまり身にもるし　仝
恵うはハ羽ぬれ蛙蛇の幾れに　仝
りあの青岡すすとん臣に　樗堂
蛙蛇の羽鞭にて出れたり　丈左
蛙蛇や思つて穴を秋にるす　月化
蛙蛇や片足あげ遊鶯の上　乙一

芒刈る手に青すると臣に　道光
蛙蛇の蝿をそくる中船の又蓑　仝
うそそをそや宮長の蛙蛇に　一葉
蛙蛇の海へ出てけり又日に　岳雑
樹の木の穴へあつまるとん臣に　素迪
蛙蛇やあ音のれしこの穴　一瓢
作山に蓑を濡るとん臣にれ　右雄
蛙蛇の百の穴見る河原に　葉白
蛙蛇の一日はくや半の尾　護物
蛙蛇の羽まそやし枕る青　梅價
蛙蛇の鼻はずれ来る枝に　蓑ゝ

虫

虫　道

すゞの上まのゝやれとん住宅　　女 寿字

はしめから根の色ありとん住ふ　　九仏 冬米麿

跡先のあさくもしめしやすみかぬ　　蘭 乞

跡先ふる秋八ぬけ草の夜ぞ　　吉 芥

松風の吹れ一天ふかし虫道り　　錦 蕗

更虫をともまりけむり虫の声　　暁 雲

まろもれぬまつき虫の音色ふ　　梓 堯

月清て虫ハ菊の中 音ふ　　陶 更

虫の声草の膝をちれたり　　几 董

むれまやほハきつれ書の小口　　自 境

思ふ音や虫のちひさきんする　　識 紘

秋夜は夜と老きてつけ虫の声　　大江丸

虫の音や落ちる花の打ちれあり　　万紀里

むらゝさふんて揺る小路　　朱 英

一声ゝむれ音と岸さ衣の肌　　一 芋

文箸や蓋る根にけ虫の穴　　道 亮

ろゝむれ井へさし込むるの鼻　　今

虫の音下げゐる来り草の上　　岳 鉛

新の柳気まりて虫のうく　　手 角

虫の音たつれよのとく垣手ふ　　蓼 亭

黄れ茶に黄なる音辻るけ秋の古　　窓 松

虫の行井しれ大ならぬ酒ふ　　三市人

森心の上にたゝく佛家也　右雅
古明やうすゝかりに小笠　卓池
古の音に同をしるそ小滿しま　丙老
古ゝるゝや古きのにゝるゝその河　菓也
古ことに関てこゝるれはよかれかり　法師　李長
明古にきさのはくやあの底　石海
古の音の沙におさるゝ小笠也　蒸子
よしゝと捨てもたの鳴音也　捨己
後のへる菓と関りたの音　米達
氣舞ハ家の根ゝれやたれ音　陸奥　乙鶴
古の音に一云もゝき堪かれ　諸陽

題義秋

古ゝるゝやコゝるれハ動く樽の月　ヽ　三徑
古明やふらさけてある学第　伯耆　楚明
きちゝや流のとゆくたの音　由之
落の奥か遥て見ゆるそたれ音　下総　玉彩
古に音のすゝれにゝりぬ姐の松　流芳　玉叟
心細ゝ落きや松むし海の音　保吉
松古や関たつ居を明ぬそ　一学
去古とゝと月にふく音ハさぬ　道彦
松古や氣舞ゝ義のさゝりしき　枝枝
法古の明やこゝろく家の玉　暁意
法古のむしとしられぬ明音也　一学

寒蟲蟋蟀

出斯悴

沈たれはぐんをなほす月夜かな　岳輪
春分すぎまるすゝたのふるつかな　麦二
すゝたの高音に来て松の月　寺岡
すゝたや山根の榜ハいつけ也　地松
けるかりに青あり草に寒むし　足彦
はるかりに服つゝろれぬ垣の籬　京　芦角
おりくすはのさすなり　枯蓮　暁壺
さゝぶ夜や愛夜を潜る巻　仝
人ちきゝ氣とあり　ぬおりくす　蓮左
おりくれ鳴や出来の竈の下　左門
夜や夏や柄もかへすおりくす　犯法　澤月

題叢秋

おりくす鳴止て夜青すゝ　白燈
おりくす行を照て鳴是れ　仙楽　嘯山
夜の旅さめるる夜すやおりくす　保吉
ほり夜の釣瓶絶ぬておりくす　伊勢　鶴石
まりくす鳴や風ある夜れる場　素鴻
おりくす起て華る　小亀　平入
鳴よりて戸にさゝる風おりくす　上野　朝宇
鳴なれに足り面る夜おりくれ　勝石
明ましや支喰やゝるまりくす　及鳴
簪ほんとちれ辛のそおりくす　下野　桃原
おりくすまゝ手風て夜風ハ鳴なす　春亜

山里ハ山よりさやしまりくす　吉川
揺られぬ有とるりまりくす　恒庵
あるあ夜に嵐をるく能まりくす　士鶴
まりくす明やいつまで瓜の花　仝
余り明風あらふそまりくす　松兄
氣死をは葬をゆつくんまりくす　樗亀
まりくすおけさや幾の延やすき　蘇里
人よりハ人まりまりてまりくす　仝
氣有や夜明ても鳴まりくす　一学
蔓草に面ず命よりまりくす　冥々
と鶴見れハ菓売ゆまりくす　悟が

鶴棲して夜をのそきやまりくす　岳船
草に下も月夜ゑまりくす　仝
見たるまに小石か下のまりくす　道堯
古いや昨の嵐にまりくす　申高
まりくす松関又ハ相なるます　素郷
あら殘や鶴飛うするまりくす　寛松
庵ゑ已喰ふ夜とるれハまりくす　子霜
一筋のあとをる夜やまりくす　喜高
まりくす長了着て居らぬ之　庵人
その夜の夜の埃そまりくす　仝
まりくす人の夏天も命なり　幽晴

まりくす叫や黄火の浮沈こ　鶯笠
まりくす楽め懸あるハ寄をしめ　仝
まりくす栗をうるまれ花らる　漫々
まりくす琵琶の上まで夜を明し　蕉句
その皆ふ口のふまつしまりくれ　一蕙
まりくす人の氣ハ長い　その　阿量
這出てゆくともあやまりくす　久臧
いつまでも氣ハ持しまりくす　黄山
夜長さや沼もうへす　栗立虫　白雄
これとても耳のあるれ　栗立虫　又明
父母の色ハ過たそ　栗立虫　諸鳴

蛇蟠

まかよれしくとや　栗立虫　鵬鵬
こほろぎやひ夜有きし　蓮朶屋風　白雄
蛙の叫面めたる　桂　かれ　又明
蛙や蛙やうかあるこのれつこ　一学
自ゆるや蛙の蛙いつれ　桂堂
蛙のまほろしつ　冬　鳴　幽嘯
蛙かうくハ夜長さ　下略　嵐文
蛙つくし蛙の口呼のいとか　園更
いとうくしたれ　塊　仝
たいろく叫夜や有れいとか　白雄
あら凄し竈るの鬢の蛇　春亜

竈虫

氣そのましていとゝよく揀覚れ　恒丸
そのゝ寿れ難ふまるいとゝれ　一学
まりやとや　苦うちかつかいとゝ所　寛松
簑　古所　簑古れ頼言るしと所なめ也　兼お
この古や意しるそのかさまし也　素鵝
この古ハ出れし日から老まり　定雅
撰子ハこのむしか見て仕舞なり　道光
この古ハ浮ろりと泣すゝ也　菓也
この古もなけ言ハ寛に入　末老
この古ハ身の枕茶迄所有也　京　為雪
古　夷　古夷のかことなり　尾様也　兼お

氣ともしらて古夷男かれ　梅人
古夷の沼聖なる日有也　月松
古簑れ日のあるまて揀なり　復物
かまなりの二月動かぬ寛也　寛徒
かまなりの這ふや松穀の垣つゝ　下宿　栄松
蟲　冬虫　積りしられ重る寄の蟲也　恒丸
見茶か氣に花迄いたゝかれ　合
先へくりや蟲の学うつり　樗堂
牛の尾にとりついてのる蟲也　天和
かまなりれ脊まもれふさる蟲也　道光
ぬれさうれ牛の降なるいたゝれ　雪笠

ひきいるゝやり蛇に来る秋　一蓑
とまりてゝ露もうけてや子の前　去節
藻に住虫　あはれさに鳴音に流されゆかな　丈左
蓑虫　啼もせでなすに采る蓑虫の声　漢物
物每の歩にうちふしなすの声　秋丈
鶉虫　道の辺や小萩にかゝる鶉の声　擣虫
底ぬけた　へちまの蔓から頭を出しふれなる　一葉
蚯蚓鳴　蚯蚓なくや松のむかしを問ひされ　鵜之
穐吹　さる人の穐吹ながら築地かな　素谿
初鴈　初鴈や魚見舟さそはれて　寸千保
渡出鴈　山茂もひさし人渡出さいよふ鴈　漢物

鴈山谷　ほと出て十日をこのまで雁の列　信更 盧水
小鴈　萩折つ尾花さかなつ小雁かな　道光
荒鴈　荒鴈や身ふるひ去けて流れかな　漢物
鴈声　鴈声の心安さを読を鵜　不同
残暑　横さまに野の子いつる蝉暑し　入公
夜しさと暑さに秋も十日たつ　米英
秋の暑さ三横の夕にさめし　竟松
朝夕の花にしむぞ残暑かな　笥老
たのしさやきるうす暑さこうの月　一葉
ふんまつて残る暑や鵜の上　博友
片頬に秋の日暑し鍬かな　漢物

扇置

夜の月に踏るまして萩の上　去雄
赤松の来てしに見ゆる踏黒れ　六義
学の原扇落をし人の川　紫黄
扇置夕の雲や渉芽　さら　蓍三
田舎家にてりすましたり捨扇子　一瓢
竹の葉扇打るへ　ぐ渡るりぬ　松江
扇ほと置やすい　そのいろりかり　朴翁
焼焦ほまて　家ふそむ　壺扇れ　鶯笠
竹の家　藤鳥を越しての居りかり　園夏
酒ふりんあまりさ　ふれこ枝の家　白雄
釣人やありたに　たてす学の家　仝

白家や萩の刺にたつつ　蓮村
山家やさう男に狗毛ぬるほ　仝
初家を壺扇にうけし　端飛れ　保吉
疎さめや家をとれハ学の家　仝
白家や学をこ居れて学の上　蝶夏
弓のけをいかれる人の骨の家　天明
鶴かけのこれ　ゆ家や牛の角　仝
粗家や世ハ過そのな拾れ　二柳
家をしや枯枝を折て戻る人　松鳩
白家や閑に捨れハ消んとす　自楽
白家ハ花の上の名ろる人し　仝

ゆる葬や名に呼ぶるゝ家の里　鉄和
白家や火をかりこ居す事の上　恒丸
子のアや明星しつむ家の上　仝
松の家落て秋しるなりお　士鈞
家に青あり誰伝列て葉れ嬢　仝
再来れハ白家にゐる小座お　仝
しつかさの目に案りかり家の軽　卧央
秋ハ来るゝ家にたたれの星かり　吉翠
後ひりて家の音をしる夜ひお　仝
朝家や存分事ゐる子の廉　堀國
白家の底のつめ心ゆれ出れ　黄二

白家のたしにかりしたる樽お　豆篁
白家の上すも志ばし地かれ　樗堂
白流の上まで家の夜明お　仝
すきましや夜ハ明てある家の上　馬卯
家なきや夜ハ秋かたれ子の氣　升六
親に孔ぬ人そろたれ家の秋　吉岱
白家に寝ゝ入たる伝れお　米英
瓜の横ふるゝ前て子の家　仝
並家の明りやるの見ゆるまで　栄孔
朝家や旅しらぬ分にぬれやすゝ　可能笠
灯ともたは火からもちるや子の家　甘谷

洲しきを庵て覚えたり屋の雲　菊三
白雲に蟠のかゝる佳花　和　仝
かゝれ乱ふ東ともしるや秋の雲　堀雲
白雲や松れそゝりハ夜のかゝ　一学
洲芳生や雲の上り乾法師　冥々
巻とて雲の流るゝ山鶴　和　月花
雲ふりし水鳥や間んじ鳥や　仝
雲ちらや鶴の心のかゝれり　乙二
山にある氣のやうなり雲の雲　仝
的かけて位居りぬ雲の中　仝
見れしらぬやうに芸ふや学れ雲　道堯

降るのかゝも空や秋の雲　仝
夕かけや学もぬらさぬ雲の正　仝
月の清を雲に習ひ嫌葉　和　堀前
白雲やよゝ自すゝる学の中　素郷
自ふをとうはを清ぬ鶴の雲　長高
白雲のおゝ来ハ春れ　蟠　和　素迪
しら雲や先のつゝみぬ秋のこと　夏松
下詰をたく心ハ清ゝ手芝の雲　奇閑
白雲もおくやめてたゝ世のゝ迎　等老
夕雲やいつのれ沼に火のこゝろ　一葉
獵好のその月にかゝる春雲　和　仝

[illegible]

菱の字
[illegible]
仝
雲雄
[illegible]
護物
[illegible]
[illegible]
幽嘯
陽の
菓也

うつりければ野や岸の雪
剃元の簑はあるらし岸の雪
[illegible]
[illegible]
[illegible]
松の木のそれさへ雪をしたりけり
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

松蓑
一蓑
秋長
喬細
梅價
冥也
凡十
[illegible]
左乗
掬的
[illegible]

家の屋世を持んとめたり　伯先
家を見ぬ人や氣の長くし　斯中
家をしおのが解にれてさるゝ　俳諧　蕉衣
学のうハひとり立たり家重ミ　猫々
自家や女十ゐ人　諸國
諸ゝ来て灯をともしたり家の前　小瓦
家のまゝと孫子の二ちものこさる　女　應々
笠無れ美の狭や雨の家　古彦
いみてひとりや閑ん家の春　与静
鶏の走言しつけし枝の家　陳奥　樋花
火をもしつまる家の前したれ　俗言　尚古

諸ゝ行りくたり学の家　菓彦
人ハ毎家見て居ても著さるゝ　伊賀　武什
家の学ハ狸に人の通りたり　一醉
並家や人目悪しこともある　蒼嶽
自家に鶏うとも来て祀にたり　筑前　白志
小兎を追ちくしたり豆の家　上野　射毛
そのうるゝとの夏さそ秋の家　李長
暖や家と雨の日よりし　江戸　季道
村ゝ家や鉗指ふ鳥のうしろかけ　陳奥　葉叟
世の中ハ孫子その之家の家　柳慶
正宗の焼み祖るや学の家　陶笙

行筆なう地の出るや霧の上　　嘗笛
霧光やはらんれ丈も井の笑　　一巻
ちる霧や柱そりたる志　沼　　車両
学と霧たとはれあふ哀光　　学芝
松の葉れ尾そさを霧れやとりれ　　江戸　東莫
霧の月を半の喚この返りなり　　加賀　梅人
白霧にぬりしそのや半の角　　三河　南老
夕雲のかゝれて霧と来たなり　　鴨鵜
松く霧のたより思れ車れ　　對馬　氣笑
白霧にけれなれ流の音　　下総　可川
砕翠の葉まも霧れく夜はれ　　陸奥　芳亀

霧

霧ちりくよのふの雲の七晴る　　月船
雲まても雲る雲のやや霧のま　　下総　文麓
家ひとつあるけ洲し霧のま　　丶女　その
逢くもひにかゝれて朝の霧　　洗浴　白英
持あるすそれ風情や朝の霧　　仙馬　可笑
朝かけの霧ふるふ之岨の滝　　素孝
それ霧大るにかけて夜の明る　　松花
白霧や落るなす宿の朝をしま　　陸奥　春鳥
白霧に笑れさうれ楽光れ　　眼川　路考
霧れまいて見てこれへとう消る　　志節
朝霧やまゝ霧しらぬ髪の雲　　英才

稿妻

[illegible]の松　吉白
稿つまれ[illegible]　[illegible]
稿つまや横の[illegible]　[illegible]
稿つまやしほうらさる秋の[illegible]　周文
稿妻や[illegible]迎さる[illegible]のあし　几董
稿つまやうしろ[illegible]　白雄
いろつまれ[illegible]　仝
稿つまやいまる数り[illegible]の人　保吉
いれつまれ[illegible]　斗入
稿つまも[illegible]の[illegible]　鶏口
いれつまや盈合をし松の[illegible]　花縣

題叢秋

稿つまや[illegible]の松　士鶴
[illegible]　仝
稿つまや[illegible]の[illegible]　存亜
いなつまや[illegible]小家　仝
[illegible]　[illegible]六
稿つまも[illegible]の[illegible]　兄立
いれつまや[illegible]　友國
[illegible]の稿つま[illegible]　一碓
稿つまや人の[illegible]　米[illegible]
稿つまたとしの[illegible]　仝
いなつまや[illegible]小[illegible]　岸[illegible]

初嵐

秋風

いれつまれ迎てきやうし　二日月　李尺
揺つまや母にもきしし女の子　伊藤　文岱
いれつまやこれはゆりれの初の日に　不驚
いれつまれ尺つけらるゝ風さかな　出羽　尋風
夜中晴て秋刻のうるさし初嵐　白雄
古池やぬれそれ起る初あし　保吉
初嵐袖蔵女人の妻たり分り　吉岱
吉夜と夜も尺ゆるそ初嵐　也松
胸寺ハ鉢に吹し初あし　丹波　也楊
秋風やこれ蘇あまる夜の春　周更
燈風や人にかけたる鉢の糸　蓮古

秋風や千無かけたる演庭　蓮村
燈風や蒼も左の中に演庭　白雄
秋風や鶯に翠れるゝ雪の春　晩春
柳まも秋まもよらん燈の風　樗良
秋風や揺ハ買ふの越後鈴　几董
笹原や秋の初風うつり来る　吉蘿
蒲の穂の長し短し燈の風　不明
心道や時雨してたる秋風　岱吉
秋風のみに立むかふ人の風　仝
毛氏の歯りるに来る秋の風　雲江
手のに流して夜ハ長し燈の風　勝石

めつらしや月の中より雁の几　芳雄宝
誉まて狗うつこし秋の几　合
雁几や弦それしめす鶴の供奉　鬼子
それといふ頃ハあれあり雁の几　大阜
比頃や子も人目も秋の几　一学
秋几のそよや木様を落しり　目兎
学那てもしろれこし秋の几　合
ひりあれハ日毎に吹ぬ雁の几　善高
親もるぬ船氏嵐を雁の几　乙二
秋几や庫よりの漣ハいつれ使く　合
これ沈むその親芬に雁の几　尺丈

その高さ氣に見よりの雁の几　玉屑
秋几や岩をさ氏せしそしほ学　箕く
あとりの志るしかりて雁の几　蒙札
雁几のふけとき樹ぬ小松か　一葉
秋几やと来るやうに老　蒙今
氣をれけしめき閑ぬ雁の几　素梨
学のまやゆしの上の秋の几　定雅
秋几や世の中垣を懐ひり　平角
それ吹その夢へと秋の几　武陵
老まて家とはるりぬ雁の几　鶯笠
雁几やり地にて手庵うし　樹也

小荷の口の廣さ大なるの風　少汝
まのふかふ名のついたれと秋の風　二庫人
笄とれハ心大なし なるの風　仝
秋の風人人の良尺て過る　亜淡
なるの吹つらしとり百日草　護西
秋風の辞ましたる良夜　卓池
河尾やゆり起されて秋の風　漫々
秋風を荷ハしらん荷ハとり　女演藻
なるの風道具拵て葬を　游無
秋風や角力もとり大男　学芳
秋の月や実ハのこれも秋の風　江戸　洪岸

夕暮や心作う見て なるの風　加賀　江渡
ついて来て永越に夜や秋の風　丹波　古合
心城の花もなれたり なるの風　鶴鳴
陸奥のちひさな眼も秋の風　後陽
傘をするに手なり なるの風　越中　魚心
しみくと秋の初風地にうほる　心城　乙道
まをなれつ蒼のよそりや秋の風　臣堂　深雅
東ゆかれの風見ゆるも なるの風　諸眉
なるの風にあいたる嵐の歯　下総　牛乳
秋風や小学の中の手の泡　松江
ゆくさかへ立也りなり なるの風　信濃　泰雄

世ハ著て名なるゝ物のれ　尾張　路郭
とこうゝ来て人にあり秋のれ　[illegible]川　路彦
秋風の秋もしらずや鶴の腰　古節
その色ハ秋海棠や秋田娘　石見　梨明
葉を見て逢ぬ人秋田娘　工二
投られて先日を見るすまれ　鳥碌
て恵うつ氣に陽やお撲元　華村
日頃中よりて風ある角力　仝
うるそのこれ老にかり角力元　百明
大内竟の秋をこそけや角力元　蓮古
彷角力風情うるかこれ髪　[illegible]

出るゝこれに負てしらるゝ角力　方明
成りにはよりて花若なり角力元　閑夏
光雲のその塵沙角力見ん　白雄
狗あるぬ花かつぎなり角力元　几董
やそうかに人分りや勝角力　仝
旅に見る弓法身や角力とり　保吉
母親に見送られなり角力元　青麓
いかに世をたり角力のみなしき　[illegible]明
頁すまふ食るゝ日頃に十倍す　大江丸
書かるぬ雲見すまれとり　春亜
お髪のいつまで学やすまれ元　江戸　椿人

蘇ゝ根の小家に陽る角力ハ　士詞
頁角力おけて語ゞきと見するゝ　丈古
ゆゑ角力頁るにつけて見頁ハ　蘇里
海ひと名の立ゆる角力ハ　屠蘇
芝より蘇より出ゆり里角力　月瓦
角力より此時にて居す洞ハ　冥々
先生といへハなりしすゝふとり　一瓢
こゝろふ名ハ家にそあれ梶ゝ函　幽嘯
打ふことなゝ森良ゝすゝふとり　鳥頂
人中や年のゝいにたき務角力　葉也
簑おになられて森るゝ角力ハ　竹子

おてこれハ年の愚りしお角力ハ　拱翠
鳴ゆゑ角力にゆゑや子の中　未光
勝てゐに風の青あるすゝふハ　陽子
名ゆゑるひの根すゝとりすゝめ老角力　我風
拱子を見むすゝもあゝや角力ハ　尚山
花火なつり来ゝ白ゝ玉河　百明
頁ハ秋のそしお金ゝ花火ハ　白雄
川面や花火の絵の揖の青　仝
巻る月も巻ゝゝ月も花火ハ　蓮古
花火ちるハ河上達ゝ是ゝ　保吉
老の雄嵐花火に追れなり　寛松

花火

花火辰ハ丘の英人を見とけり　三津人
もらかれる星を語ふて花火か　瑞馬
学の家嵐花中にこぼれけり　伊藤　九万里
夕良れ霧をついぶれ花火か　駿駕
幻もとまれ下まある花火かれ　李尺
しらぬ火か芒にうつる三十日か　浪玉　鬼将

未知火

俄誹農句題叢秋中

八月　桂五古帯輝

八月や葉ハ黄色にあらしなる　鉄仙
八月やはらりの夜も黄しき　士鈞
八月や十日にちかす夜の心　朱衣
いりの白もすこしの学の氣根　淵中
いりや丸て夜まして清しすれ　柑翠
いりや日前に別し花すき　渓々
いりやゆつくりとれる夜の定　瑞馬
葉月　秣百ふ人に白ふる葉月か　政二
芋の葉の立てすれ合ふ葉月か　長翠

竹 去 埼も出て井の表にハやきれたり 伊孫 湖芳

八朔 い朔やさて里よりハ二日目 蓑村

い朔や扇さしたる小百姓 蓑古

い朔のさそ稲雀井にさへ 白燈

い朔や蜂子さし酒ふまん 樗良

い朔や松に出るく 朝鶴 政二

い朔の旭小里をなしめれ 存亜

井ゐや坐ハい朔の里 竜 士鶴

い朔に葬もそやふえ桐 道彦

稲や花やまろい朔の門の学 鶯笠

い朔や氣に入たる田の嵐 寒松

名月に朔日よまて来れたり 丈老

田亜 田亜の日ともて寄る医の氣智れ 洗衣

鷹鳴も出し田亜の田つられ 白燈

八朔梅 鳥やすそてい朔梅の星月夜 清々

徐り器 猿り器や素ぶきなと好きを聖 不知作者

宰府象 八月に閑に探つて梅の花 寿剛

呉服象 いと花ふるふ手ふれ象れ 仝

初月 初月やそらくそれ山越る 斗入

山里やゆかりふ屋の初月夜 士鶴

表交に来ぬ人来たり初月夜 樗里

初月や鳥帽子見人のうしろ氣 道彦

和月や二朝より横の蝶　立　岳船
和月の夜にハえられしなりけり　壽閑
和月や草木にゐしむ屋の家　篤老
蔵かけや荷なもそしる和月夜　素既
二日月　八月の二日ハ月を見る日　春亜
名月の初花ゐる花二日　岳船
風そそりく月ハ二日の名因　雪岡
あおすのたれかゆて是二日月　懐城
三日月　蜀黍に穂首にゐれけ三日の月　晩香
花とも見るに殘たり三日の月　橋堂
三日月に小豆飯をふ出来　素濤

三日月や周をうけ辺波の上　岱吉
三日月や光かやんて風のふく　春亜
考れるく蔵の河より三日の月　吉川
三日月に笠ふれすると光　琪六
三日月に火も黄なめ兎　栄兆
黄しかまをつゝる二日の月　蕉里
家にあれハことにめつらし三日の月　菊三
三日月のかけもたらめ草の舞　長斎
そやあすのかしかんかり三日の月　素梨
秋の夜のたしかにゐるや三日の月　蕉白
三日月の光にすゝる塚ひ　護和

白雪の月てこそあれ三日月　廉望
笠について黄昏見しそ三日の月　観之
三日月の雲も忘め層雲れ　江戸　嬉遊
何事も不足なりこ三日の月　伊藤　吾好
三日月や連歌して川水の上　陸奥　擣白
三日月ハ非の先にこ居れかり　尾張　和平

文月

ほくとと文月よする芦辺れ　斗入
芦の姫に又日ゑりれ月夜れ　存亜
山里や婚連ありそ雪月夜　撲也
待雪　待雪や氣藥の鋼の照　柳所
まつ雪や沉くにきこ能へし　蕉古

待雪や ほりしそ芦原 釜　白雄
まつ雪やまのふの月も見て来し　存亜
待雪にとり拵にかり新あやめ　一醒
待雪ハいふ掃て後 層　千仙
待雪や大るにかる月の雲　一学
うらなくも月見つ月を待夜れ　堀内
待雪や海鳥ゆ笠の咲をん　道彦
長果さの十又夜見へ今待雪を　仝
十四夜や箔のこ居るし茶 芸　蓑雪
まつ雪や月代刺さは浮世めく　庵人
まつ雪ハうれしきの木の月れ　其文

待雪白

名月

まつ雪ハ星の月夜をまちてゝ
待雪の蕤ふく心よりかり
まつ雪の思ふさく蘇咲枝枝
待雪をむかれ宮ナハ作り心
星の夜にまし むかれ白れ月
ぬれるから月の使に来る月れ
名月や雪ふ人も雪れ良
名月や白を淵なる池の上
名月や生れかはらハ星の松
名月やかけも百ある歌かる
名月や実ゑ有ありけり

丹波　柏支
筑波　芦月
重川
青良
恒丸
乙二
鳥醸
蓮村
蓮古
柳花
樗良

題叢秋

名月や生れかはりて雪ふる
名月や雪ハ夜中の一むかし
名月や定るたつけて泣上ゝ
蕎ふて家れ業して月ひと夜
名月や心の松と星の雲
明月やうくと出て星の上
この頃や明月ゆるめ夜とて
明月に心ちひさくなりけり
名月や明夜の風らハ屋ゝずれ
明月や雨二重の猿叩く青
明月や星ゆ隠れかけもなき

白雄
青蕤
仝
保吉
二柳
鳥明
豫石
斗入
天明
仝
重厚

明りは海東の隣々に小蘇が　存亜
明りや春られにるれ〻芦の穀　張良
明りとりふ目出たかりけれ　士鈞
明りにおれるれる瓦　かれ　仝
明りや すくに枯たる蘇の原　長景
明りは何にうら見ても見るゝ　植天
明りは夜を白蘇の雲が　井仁
明りや陰演よりは無つれ　菜兆
明りや山の奥にハ山の月　樗生
名りを大るにふくや蘇の風　米英
明りも雁の前に陽りけり　仝

明りに春ふや小雁の一ッ瓜　仝
明りや鶯の夜へし山の上　青岱
明りや忘るる花　花東　沙羅
明りや指ふ住とある草の露　白石
明りや雪れ花ゆより一ッ薩　完来
明りや晴ての後の音草外　平仙
明りや月れ雨より雲の骨　蒼米
名りや今て雁の中の葬　蒼二
明りは夜しもてゝ手深山や　蘇星
明りや このやうれらハ天の人　仝
明りや明てゝ命しき山と氣　仝

名月や樫子の釼も出て来ん　一字
明月や名ハ翁かわりし宿　仝
名月や孤れ来れ亦の人　其之
明月や八十しか昔の包れ　乙二
名月や小ぬる盥にしゆの浪　道彦
夜アも秋里も文姫の月なりき　月底
名月や爪をちぎする許の空　岳輅
明月や人の深山木花構子　仝
名月や気れ出来れハ鋭二人　平角
名月や来ても蓑のなりこと　李梁
明月の雲を舞かと飛鴎　寄圃

名月や着れやゆる雨か之も　蒼亭
明月や淀古江の舟の者　袁丁
明月や水中の気の柱建　桂堂
名月やなしとしそれぬ地の足　寒松
明月夜桜につりする道路　鶯笠
名月を一足よれハ来ゆりかゆ　仝
明月夜舟かたそ蘭菊根　魯隠
名月や明月ハ菊の露すなす　瓦全
明月や夜ふけし出てもり泥　康人
明月や樽を露すも姫の声　直麦
名月を見るにて名月夜雨例か　一葉

立よれハ名りもなめ松もなし　　同人
名りや云ふるれハ山とあ　　女志宇
名りや家送り峯井の中　　梅間
芦火帯て明り脱ふ夫婦れ　　護施
明りの捷あり之海の上　　井眉
明りハ人に家ゆ所之なり　　荒木　一華
名りや餐と恋する心あり　　井岐
名りや ことしハ誰をまれ追　　一慧
明りや一里生ても葬のて天　　布席
名りや延てそ十全 油 蛇　　陸奥　井路
名りや葬の名ゆ云ふなり　　素流

明りや目を休むれハ夜をうす　　、　香冠
明りや死る生この年の上　　北尼
名りれ家ありなり学の家　　雲平
明りれよりも氣ゆてりら 汎 良　　松江
名りれすこしなさふく寿れ　　諸陽
明りや言ふ流れ農豊法師　　武蔵　一句
畑中ハ夜名りの往来れ　　尾張　平家
明りをめらさて久を白の雲　　女喜聚
名りや寿て居るまでも男の夜　　玉之
名りや塔のうく なりしもと　　武蔵　三壽
名りや何れ寄てもそれ之の　　尚山

今日月

[illegible]

樗良
英才
仝
青蘿
二柳
五明
大江丸
存亜
士鈞
恒丸
松兄

[illegible]

張六
樗堂
仝
宋英
巣瓦
丈古
喜逢
羅里
仝
大阜
道彦

なにくれの句に夜ふけたりさよの月　巣也

寄よりも先への空やさよの月　女 滨藻

人々の物とやいふさよの月　是尭

汲汲て海人へ見せたきさよの月　越後 文喬

誰すらう刀拵しもさよの月　蕉嶺

さよの月花見る頃ほん光なり　能登女 召芝

冬よりある年ら来りさよの月　美濃 撫左

月のさす文アめて友ぞ初鳥　去行

新月

新月の新すさまし十五夜哉　平角

月と宵

月と宵あらしの萩添ひ出たる　蛍求

月まつれ花も宵にも暮れ行く　白濃

名月る

まつれハ月の都も宵の月　当之

月と宵花も手ゆく也同し　素郷

月と宵秋吹風も是ぞれそ　道尭

東憎の跡もなしき月と宵　仝

月まつれ宵前あれ並あれ　建更 可年

又の夜ハ十五夜と名月と旅まつり　三化

月と宵閑ハ宍戸へ名月なり　吟糸

萩布の豆磨志摩ハ月と宵　文梁

光あり月は中より寝る也　閑叟

村へや月満ちの夜あらり　白樵

白の月さらけ合ゆかよむ椙拵れ　春亜

十六夜

いざよひや闇より出る木々のかげ　樗良
いざよひや雲から寒き簾の空　蓼太
風恐しおしくに欠けり月の秋　暁台
十六夜や闇ともなれば花芒　青蘿
既望やきのふの光を青表　保吉
十六夜や人を送りし松の影る　存亜
十六夜や野まで人は竟へん　蹄石
十六夜や浪の霰のめれかかる　斗入
いざよひや月にかかりけ霧の声　士朗
十六夜の月に雁をする鳥かな　松兄
十六夜や錦殿の闇や赤し　某雅堂

既望や風の新しくよりあへん　仝
月を今はいざよふて書く尺素　一学
既望の月見めすれは女子かな　乙二
十六夜や蚊れ笑ふりし池の蓮　道彦
十六夜は人の多少ずおんなり　仝
十六夜やうしおれつる岸の浪　常笑
十六夜や静の宿も許の闇　岳輅
人さずれ山のいざよふ夜かな　仝
まのふより又ともめり十六夜　魯隠
十六夜も闇を見ん出る夜もなり　蓼々
十六夜は鶏さへまうしまる　花海

見れば振る雪のやはらかさまよ月のひま
既望のころしまや秋をうそ雲る
いさよひやをさ風そ場の曲りに
十六夜れそしまる松の月夜か
松ふさしいさよひの周の放れ陰
十六夜や探りあてたく猟の指
十六夜やこれより秋のしるし
十六夜の雨りかるそ先の山
十六夜や講へこころ広の夏
十六夜さひろや紫蘇のかけ汁
白のあり十六夜の方係支あらん

家 食菓
飛は 撰姿
籠も 巨詞
逃は 東嶽
白桃

十六夜の周をうそうれ小白か
漏うけのそれ壺しそ茶か
雪雲といふさへ月の白ひか
よひやそやそのとしの藤茶
雪雲や碧れもるそのの道
見出月 うらめしさすそれ月千むおれか
ありれも廉の洞の白夜か
曝や木の月の月を吹光
立待月 たちまちや月のあすはたらぬ人
外待月 ふしまちや夜の心れうり初て
月 きこそいふくれ月を見すか

土詩
知己
膵氣
詩詞
書氏
樗氏
陳石
貴川
宇拍
万和
曉意

芦の目追ふるゝ屋と花ゆり　陸奥　呂埭
どの子の家やたつめるやの目　出羽　巴陵
洪炮の巻賞しなる目歌か　外古
久り乗て家の門さく目歌か　陸奥女　左代
寒まさの又ぶりしなし雲の目　惟平
はしたれの身に添ふ目の光か　丶　女　可遊
しまきて氣を取る目歌か　林磨
氣ひけハ目の光にやうをかり　近江　玉英
葉うはも草蓮さくまも目歌か　河内　徐葉
走山の光ぶるゝ目歌か　伊勢　志宛
目ひけやはしくと見る歌丸山　石鼎

おろしとりはく目の葬れ　竹陰　古皐
目のとふ道さへるしや山の葬　古芹
石山や長寒に出る秋の目　暁意
秋なくハ歌なくハ目の照さん　保吉
雄ハたゞ秋一ぶいの目歌か　岱青
むらくと尾花にさける秋の目　斗入
秋の歌や目に押あふ松の新　仝
見ゆて歌れハ草に秋の目　存亜
梨壺の冠する名人胡の目　大江丸
秋の歌ハ明てもしはし目歌か　土鈴
山里やりくりに出る秋の目　希云

山里に住みれてこそ秋の月　喜季
蓬のふの裏さて秋の月あれ　樗堂
夕暮さまれ捨れハ秋の月　仝
いつれ所もそるなかなに始の月　仝
氣をまつ友あり暮の秋の月　左琴
名なくハなほめて悲し始の月　完来
酬しや泊をいそく秋の月　蓄二
おりしろや分ハるゝは一の始の月　藜里
山の始月にすんの寒りけり　席枝
濡色やたりれそれに秋の月　冥々
松風ハ始るあれに始て始の月　藜乱

かけ飛る聲アヽ山あれや始の月　乙二
松の風よ出るゝは印と始の月　仝
さりとてそ雲の多さを秋の月　月雨
大ひの人ハ友なり始の月　岳語
文書にいく所もなれて秋の月　素槃
始の月出れハ雲の夜ハ並す　長高
稿の月の月出る友入て始の月　寿渕
陰なす雲の夏より秋の月　雄渕
おふしんとしてもさわれし始の月　魯隠
草に木ありとめ見てそ秋の月　寛松
春雲の夜に入れけり始の月　申高

接てあしあるかまのを秋の日　　羹々
よのんありしあまりても始の日　　護持
あるあさへおもひは秋は日あれ　　庸人
大宮や月をも氣の始の日　　石河
詩の氣接てもとるや秋の日　　爲頂
書家し見おしとすれと始の日　　京　　壽逢
故きをあなおとるりもて始の日　　久藏
かる世にかるかれあり秋の日　　尼　　毛色
おのつ世の深しは寒し始の日　　出羽　　河道
更りや柳　夢の秋の日　　倭好　　芝邦
氣をのかさに見るん始の日　　北溟

よかる景の白ひ　　秋の日　　尾張　　杜堂
老鶯なる藤の君や始の日　　筑前　　万年
ちるをれば氣や孫ちさん秋の日　　甲斐　　芸恒
親おとゝ子おとゝ中に始の日　　薫峰
赤子にも孫ぬるをはる見秋の日　　外入
松風や月をこゝろ手波の上　　下諸　　兼明
月見して寒りかしまゝの上　　晩香
濃井にあれそとくこの月見　　白雄
月の晴の野中も遥る月見か　　英才
目にたゝぬ人の月見や井の夢　　保吉
乞食してあそ晴れぬ月見か　　斗入

ふとん見て笠見て起て月見れ　仝
十六夜もさて月見る在所れ　土鈴
月見とてゆけハ渉とる小橋れ　仝
蕎麦畑もちらるまゝ月見れ　松見
おりふさま月見る連もちりけり　桂五
夜もすから風にふれて月見れ　甫天
氣ふさつあれハ月見るもすゝれ　米英
棹さして人目にそむく月見れ　万鶴里
まくや前ハ月見のすまし汁　廉古
蕎とる人なるらふて月見れ　露橋
寄合に百発すく月見れ　真く

あやくとあきまつて月見れ　岳輅
このりしやまつれ氣の薄ぬ月見　道彦
月見をそうすきるきに座て　仝
山里ハ罷るぞ月の見やく　蕉句
小如屋の氣ハ良くるる月見れ　陸奥　子容
月見すや老人なる一の人　寒松
たゝ居ると人に見られて月見れ　常笠
月見するうしろさるし笠の音　梅價
追かけるやうに連寄る月見れ　井房　亜然
月代や見てあるうちれひむりし　鳥頂
咄をぬ人によけたる月見れ　芝山

月の秋

松月さ母と以子供ホと月見せん　尾張　圃曉
捉子の丹を持あてし月見か　書元
夜くや恵子に形をひく月の秋　古鈴
遊びへくり出ても月の姿　恒丸
月の姿汝さ手まれ虚なれか　廉古
さるまにつまて自しいれの心　陸奥
稽の花

稽の花の旬もすぎるし　白雄
いれの心ハ君と我との匂れか　春亜
身にのきて見て陽りなり稽の心　猿古
何稽の花をさまりし月なか　乙二
今日月といひ白雲の稽の花　武陵

稽

世にうゆるんまと稽の花　呉老
稽の花日和ありけり白ふるり　相模女　とく
かけ稽に風吹るつ田か　菊香
松明ちうら稽を見て潔さ　白雄
稽に穂ろそ氣身ひつ形れ多　江戸　葉明
先ぐや秋の心を稽の上　深海
稽たんとつけて鶴しるの首　乙二
いかりけてなしかりけつ松　道彦
さ波の地もあそ古れ稽の姿　寒松
稽こまり狭に黄ちむ久日か　雪笠
稽の女やされハ二夜さく杜若　一慧

稻の穴に松風あまずりゝ　本　陸奥　壺去
猶兄の占も冥々り稻の群　魚文
そくさい風手冠れ々り稻の秋　蒸子
子　稻　よす里や川にはすもまをは和　席枝
まをの穴やはしりあけなる雪の中　菊三
まをの穴や鶯も晩りをさまさへら　道彦
晩　稻　ほつとして葉山子もたける晩稻が　蛙夢
花折てりのつまりけり晩稻が　存亜
稻刈　稻刈やのほれハかる糸よはれ　白雄
稻刈の背中よりのあるゝ　存亜
稻ら　や刈や目に黄々　雄　士鶴

家立て拵れする田刈が　樗堂
稻刈のうしろへまする酌が　祥禾
稻刈てあまる近く来れたり　女　百柳
古隠秋の名によふ男が　平角
老ひりの田々ある月あれ　上野　百童
蔵　穂　池買ふてこゝ成る也路此蔵穂が　蕪村
木の蔵穂山の木の実の数れが　保吉
疇の蔵穂又稻ふれたる西日が　存亜
毛　見　十分の秋やゆらく毛見此なる　丶　阻雲
夕月此頭てりたり毛見の輿　住法　伯民
稻　舟　いろ子にやいなといふ子にさし花ふれ　寒松

いなかわや思ひ見たる小松明　伯耆　沾雲
稻　筵　夕風や鶴も動れ稻むしろ　蓑左
夕暮と思ひ過りけれむしろ　大暁
青　筵　秋いまゝ寒生姜とりて青　筵　道彦
稻　頭　稻頭や娘十分にしまゝ居と　京　一桂
焼　米　焼米のみりよりかゝ米の乾　雑風
新　米　新米もまゝ米の実の白れや　蓑水
うるまゝ寸まれ居ゝやこし米　几董
こし米乾米の小葉も青こゝり　一葉
田　与　おのゝ者の老松明の山田与　枕鹿
おさ吹り産ゝ於れそ後用る　倚風

春　むくゝ鳥の横にふまへるまゝ　不知作者
夕暮や春花ちる古やしき　堀前
木犀花　木犀も日のつまる白にはあらし　枝枝
木をいの出に追れてや雪ちかれ　荊玉
芙　蓉　月こちて夜のふ蓉に残りけり　焼意
白芙蓉焼にたやせる夕々　仝
花ふよう沸しはは氣心　すて　恒丸
ふようちる小夜や逃ずる現れ　仝
月雨くふよう日にく花の雨　士鶴
ふよう見る心まゝ見るさりし　米英
すゝなまゝ桂し母なしふよう咲　乙二

檀特花
紫苑

ゑのころの上にあまるふようかな　寛松
鶏頭花後はふまれる日数かな　護施
小白きもめくる酒ふし花ふよう　高静
秋の心をあはれて見ゆれ花ふよう　汝南
たんとくや秋のまよそ花の咲　菓資
露こめて花や志をりの花紫　百明
松かさ手れたる月見ゆし紫苑かな　道峰
此頃は丈を見るらし紫苑かな　葉流
大凡の紫苑そある姿かな　乙二
乙鳥のりき見る立しをんかな　道喜
二日月の宿は咲て紫苑かな　寛松
山ぎしや秋の志をんに押うつる　枚古
壊田土手のちいさくめしをんかな　女 九代

鳳仙花

ちよつと実をさいつや鳳仙花　上毛 澤範
まりそめ乃そくて一庭鳳仙花　陸奥 蘿山

鶏頭花

鶏頭や深木の中に立ある　鶴醸
鶏頭の根にむつましき弟かな　華市
鶏頭や追つ侍つ乃又六本　百明
あをかきの外雨ける鶏頭かな　一子
鶏頭花の八月七日かな　月化
菜きよめの鶏頭も眼の名残る雨　寛松
老の眼や赤鶏頭の大きさかな　相模 丈可

不足なく秋をしめくや新わら　漫々

新わらや杞でも雪気ハちつとの子　安房 東流

新わらや代わけのところそうけや　京 乙麿

新わら流れあるところの気　杖丸

新わらえらん出来女代人時　老翁

雁来る

おめしかの毎日たつやをけいよし　人旦

鬼灯

鬼灯や清き花女ら生写し　夢来

鬼灯や見しまう子の口の中　近江 素帆

ほうつきにつまでも君が手の　泰人

縷を子

深る月や残暑挂し妹が秋　陸奥 志げる

来まうハをくれ出そるれ残ハ縷を子　紀州 素見

白粉花

おしろいの花やわかきの葉描也　李暁

秋海棠

梢海棠子の気がわしとけ打ちれ　柳風

秋海棠葉よりも花れ未れなり　又波

まのかけれわしと腋て中腹海棠　作州 良朝丸

小笹のいつも貴れ秋海棠　一瓢

梢海棠あまりおそりてかれ甚れ　雑咏

そのかれ良ハ深れ十分梢海棠　孔禁

養花し梢海棠れそよふられ　枇也

家の名ハつ子れて来より梢海棠　角来

鵲上戸

みなろもとめあれよより上戸れ　陸奥 叢里

獨活実

獨活の実れ風ふれ千ら寄れれ　惟平

蓮の花

三種の十出れ見て蓮の花
花か姫か蓮の花ハ
花蓮の沙しさるゝてあらんゆる
蓮の花咲て砕れうる小蓮か
かさはくハ雄るりしと蓮の花
益れしまの蓮ありやうやたのむ
うかくと小蓮つれかはたのむ
釣竿にかけて蓮るやたのむ
蓮の見にさし出すしやかの月
蓮 姫 新家にふしく折て姫蓮か
花 蓮 夕虹を月の栗まして花蓮か

對る 杜國
大和 赤嶽
信丸
左来
多酸

蓮 花

詔先に当見て蓮る花蓮か
花屋やこの花蓮をしとかす
折ハまてつゝんて過る花蓮か
折つゝも見やりかたる花蓮か
古器の古塚にしたれ蓮か
吹消したやうに日蓮る花蓮か
地の花かけて蓮のこゝれか
犬の蓮出はし里ありてむら蓮
松風の蓮ハ根にある蓮かれ
垣手潜る蓮ほとまてほれる
山ハ蓮て蓮ハ蓮氏かれすゝかか

尾張

石葉
亀父
理玉
蓮松
國村
菓蘇
成蓮
仝
蓮古
蓮お
仝

桂花や田を見る人のぼんの屋　保吉
見ゆハさらに花のりゝ　伝言
桂花に娘立よる水見せ　存亜
桂花に陸れ来ぬ日もなりけり　斗入
けの れからゝ又著そめる花　大江丸
花より出て其ほの花かれ　士鈞
青白の里に日のさす花　仝
見るまれりゝ又きこつき花　樗屯
沸しさを花にむかふ花かれ　仝
詩書りく花に入日　道隣
うしより来る花や関の及れこし　鈞路

おのさまのさやすきれ　おそれ　桂花
花より出て花れあらし　越中　呉山
牛の角ばまくこゆる花　米員
ほり出れハほりかくて花　友國
夕風の星あらはるゝすゝ　完来
そのいへハ吹てゆくこ花れ　甘谷
まふハ風なりけり　花　青牛
青白を見に来ゝ　花　五二
山陰のまに著いそく花　仝
桂に出るといそりしらめる花　自化
秋ハこれ花にまるや山の学　道彦

是迄のすゑん芸にもたれかり　　流陽
淋さきまされに出れハ芸ハ　　京　其米
跡つけて見るし芸にあの仲　　渭北
文るおれむりみるる芸ハ　　尾張　葛高
漣と芸の月の小氣かれ　　松江
國友の芸にかるゝ夕日ハ　　魚文
雇から鳴まても見る芸かれ　　京　百丸
あ鳴りすゝや芸に中の氣　　洪圃
河着て雲着て雲に芸ハ　　方永
落きし芸に風の氣を吹　　伊勢　半古
山風や芸に肩の狸汁　　伊藤　紀及

花芸

物ハとくゝ夕ハ遅ばすゝまゝ　　古笄
花芸小松かうへにそよぐかり　　嫁夢
日も暮け立ぬ芸に雨の上　　暁意
これやこの氣まにさゝや花芸　　江戸　柴尾
文着れついて来る之雨芸　　陵石
雨芸牡丹餅の日頃極ハ　　存亜
陽光に秋ともあつり雨芸　　士鶴
この奥にしる人もあれ雨芸　　米貞
これまでの芸に屋そこれ芸　　葛里
風のよい深け以そ花芸　　端雄
雨芸翌の氣を吹のこれ　　養虬

花芸河壹とゝへし河店のまゝ
うゝ寄れ石うつりぬ花 芸
花芸人の白髪も見るこちそ
但名にうつ名ゐりなる花 芸
むつしゝ月れもるゝて花 芸
蓮と蓮と寄ゝあれなり花 芸
然しさき老のゐるん花すゝ
秋三月月廣にゐりぬ花 芸
ゑゑゐるハ氣花ゐるん花 芸
よい雲ハ雨にそあれ花すゝ
廣る筆にゐれハむりしや花 芸

寒松
申高
秋長
幽嘯
桂堂
梅間
雲河
菓也
左文
常陸 雲猿
尾張 滅古

さゝるゝにつり合よしや花 芸
嫩入の川史を黄や花 芸
一人つゝ橋をまゝるゝや花 芸
娘やれ村のれそあしら花すゝ
家けるゝ浮ゝ立める尾花
来る道ハひゝつにゐつて尾花吹
雲ゑゑや尾花来れ 猿子雲
いらくと尾花にあるゝ夕日や
泣ゐくハ尾花ゐれに雲見へし
有れハそや黄てゐる尾花や
花ゝし蓍てやらるゝ尾花や

備中
桃鹿
壽彦
手眉
古鈴
百鳴
蛾夢
白雄
一学
道彦
庸人
美蕊

尾花

人里にあいてるゝ尾花の風　京　其楽
度る日や尾をかゝ上に風起る　句考
尾をむすぶ鶴しといふ画雅坊　女　應々
芒　散　芒ちりて名にいろくと流いつ　曉衣
芒散るにあつまるゝ　士鈞
沸さんなへすや聖辺の芒ちる　合
芒ちるまや人送り人陽る　他力
飛　麦　かるかやはまとに秋の花なるそ　閑道
刈蓋と心をくに出るりかり　踏石
かるかやにてさまりてり小石れ　斗入
かるかやの花を乱すまれ風れ　恒丸

花ちらはこれかるかやにかりめへ　茅里
かるかやの折えよりや酒の下　道彦
かるかやにあるかもしらん　畏　風　宛和
かるかやのざまへに晴し氣老て　芝山
山あやかるかやの上を幾とす　女　志々
刈かやのそれさへ春は捨おれ　吾孫丸
かるかやのかけもるかにはまきせれ　枚長
かるかやの光つかに通る月はれ　東陽
蘆　花　蘆の花又蓑かちに見ゆるまで　東流
露　芋　露芋や月かけおそ明るう　白戸　呂曉
露芋に猿を染々山の兒　菓也

野菊

川干の月に見ゆる雲葉や　鳥蘇
子狐のかれ息るる雲葉や　葉村
るつりき志きたりの雲葉や　仝
山人の髪も白ずれ雲葉咲　昭九
花ぐらある中の人にそ雲葉るれ　一学
すゝる外雲葉ハ折う枝もるし　道彦
ひかし氣地にも咲し雲葉や　枕去
自をかけてこれハ雲葉も白かり　俳中　捍歌
すゝして月夜に別る雲葉や　古文
松風に附白そこ見て雲葉さく　東諸
音語に道遥ゆけハ雲葉ふじ　丑成　梧鶴

菊烟草　草附も色ぬ火瓶のかけたそて　道彦
石女の瑞ハ沸し菊たそて　江戸　牛桂
烟草花　秋をしも松風里るるむたそて　玉屑
牛房花　志屋らしく咲や牛房も花の秋　弘山
あり引花　小ねりや有引菊旅の家　東琉
菊　一年つゝぐ世ハ幸し雲の菊　柳花
菊の花ハ有に引ると山辺や　暁氣
雲の菊早夜ぐらぐらり白熱　白燈
菊しう菊ハ寒ふ人の姫　仝
菊ゆゑ松にもかけ無酒取や　麦羅
笑まて菊のたちるる山家かれ　下地　道澄

桂漢てさけしくるりぬ井の蓍　長翠
末枕もふつとたるし蓍の有　上中　布什
柳干を葉にいふや蓍の有　道彦
山端や蓍をそれハ人の氣　白境
めくら蓍ハ葉の靜まて木の蓍　野山
大は画に鈎葉とるや蓍の氣　古彦
世をまれにりん自ふる蓍の有　富蓍
うら見をて沸ぶ蓍の心ぬ　蓮古
氣るのもかくてハ沸し　蓍　仝
秋もまや小氣見えずぬ蓍　蓍　存亜
くふも赤しぶのかも赤しかくす　瓜　道清

蓍　蓍
瓜　瓜

かくす瓜すりと赤く米にかり　中角
蔓ひけハ遥に来しかくすより　居鈴
蓍うりあるにおもて語かり　寛松
ひと里ハ氣ぬるや　蓍　瓜　与靜
道りや柳なしぶどく捨れ子　貞佐
かもうりを二つ所にる人もろし　麻又
捨なておるなとるりぬ故茄子　寛松
犬の子も干さるも数や芋　道彦
麻かられ箕にたさうし小いもぬ　冥々
姉さの箕にあやりたるぬかてぬ　芸才
的蓍のあらむ道のぬかてぬ　芳々

蓍　蓍
瓜　瓜
秋茄子
芋
零眼子

題叢秋

この匂ひ葉にも青くかめるこ版　吳光
十はかりめるこ接れぬ松の白　惟平
蕗蒻花　元ゝまでの花に肩かく女かれ　素迪
同引葉　月引葉にはあ見そうを山の氣　米英
芥子芥　風にまをあてゝけし前月あれ　又蒙
粟　猶さしの拓うれり粟粒和　暁意
粟の粒の著ても波に追れたり　長聚
粟の粒にかる煙の花　道産
粟ちとら出来てのちの犬の事　万和
粟の粒に立るうらこそ刈れたれ　月紀
黍　黍の中嚔花して徒か来る　道産

蜀黍　たゝずれの粒に出てきずれも匂し　可布
蕎麦花　ほつ氣のかしこ良之そはの花　兼村
古いてや酒ハあしくとそはの花　仝
焼る の目にも浮脂やそハの花　蓑左
一面にしてへ二面にそはの花　桂又
そはの花十月ちかなきかりや　伊勢　周樵
鳥跳て東西尺きたりそはの花　紀寸　玉阜
のあくと浮鉢をうるやそはの花　葉兆
そはの花世にあく人の持れす　丘高
己烟やそうもそそはの花　卓池
化されて湖水にしてそはの花　輪之

蕎麦刈

無足も一畑あてゝそはのかれ　江戸　白頼

そは刈の通りたれは潮の上　道彦

新そば

新そはや庵あて暁る樽の音　葦丈

新そはや小嚢とりて夜の雲　對山

菜摘

見そ共も古お人の菜ほり　月樽

其雲の首を入て菜ほり　恒丸

葛根掘

松風も引留したり葛根掘　二笑人

木賊刈

秋もゝ千一本はむすとくさかな　不鳴

とくさ刈風にきらなる木賊かな　春亜

忘れまた言葉ありぬとくさ刈　麦之

初汐

初汐や貝のよりゆく一つ庵　柳也

初汐や小松れ中に月のかけ　江戸　乙河

初汐に追れて戻る小魚かな　亀哉

初汐は瀧落たるはかりかな　素鴻

初汐や芦辺そよさして鳴庵　恒丸

初汐に揺るゝ舟の押やの口　巣兆

初汐や松の下なる漁架うち　道彦

初汐や濡て色ある濱つら　素迪

初汐や鶯うちりも帆かけ哉　嵐外

初汐のおしよせる濱大かな　績庵

野分

今朝に白吹こして野分かな　葦之

椎実て底なきを見舞ふ野分かな　亀哉

二百十日

二百十日末に掴む事の先生さん　重松
二百十日ハ月のすり　暑　瑞言
節を重ね来る二百十日ハ　紫明
庵粗をうけて通る彼岸ハ　素言
浮世まも実に入秋のたりんか　上平　如白
田の鍬の息つく白のたりんか　月紀
放生会　放生会この夜粉河も月おそ　白雄
秋風に昔ハ出来るり放生会　吉高
放されて猟へもゆかぬ小魚ハ　佐渡　素蔵
放し鳥の恵こもくるるり　老江　無方
親にあふ事もあるか放生会　下総　兎園

豹牽　豹牽やはやけて早斐の里　男　重左
豹牽の笠のほつれも風情之　丈左
豹追　豹追ことにゆしや　氣白　兼お
飛くその清水にたてく豹追　白雄
家のうる用きのこうて豹追　寿剛
出代　出代やこの季も葉を出るめ　京　食毛
擣衣　こゝちゆけハ追く関ゆる砧ハ　兼お
明んとてうつや砧の音ハ　百明
悲しおもとまるるもん小夜砧　曉衣
うつらく月見てあれハ砧うつ　仝
老里の姫に出来て砧ハ　重左

月にかゝる月の裸やふ夜砧　仝
きるしらぬ里ゝつりしやふ夜砧　白雄
衣うつやかゝ手ふ夜光　岱書
猶のきりされ見るぞあるや　不明
と知られハ古のこゝろ砧や　仙仙
雪のつゝこゝろ砧の折や　素飾
飯巻の砧うちたり戦りたり　重厚
見れいて男ハ寒ゝりふ夜砧　存亜
木のはしの鳴とそしまてふ夜砧　仝
恵まゑきすゝ座しなる砧や　大江丸
かゝとよ砧に乱る鼓　雲白

砧ゆ花きゝ身に添ふ月夜や　雨城
軒ゝさやかゝハ時白の壺　砧　恒丸
ずめる関ゆ人ゝよりも気之　仝
小夜砧関のたりしハ気ゝり　士鈞
小夜砧月のうちすも雪やおく　仝
砧うてハ光のうる板　うれ　不雄
里人の温泉に来てはやふ夜砧　年心
いさゝれの雪ゝるて歩　砧や　不飾宜
夕山を見て花れハ砧ゆ歩ぬ　書牛
山松や夜アのずめるもそのあるり　一学
唄ゝるずきさゝこれやふ夜砧　道喜

長月も廿日になりぬ元うつ　仝
さそはるゝものは遅く達　碓　月雨
氣然しいかゝ就かぬ元うつ　仝
米多く拘て渉しよきめるか　平角
達かれと打ち雨もある碓か　岳猪
負すゝて心すむ雨の碓かれ　天芙
己陰の雨をこらへる碓かれ　寄剛
さはついて碓をよきめ筈をか　鶯笠
れた音の添ふて更り碓か　仝
前からや碓の中にさゝかれて　桂堂
義の所を小坂のうけや元うつ　護物

あくに元うつ学の中　申高
心高く歩こんはのうち元　寒松
学義や君々代をふく小雨碓　一葉
子やをかむ碓の青の孔をハ　越浮　山之
うつ人ハ打ちよりくうつ碓　井肩
元うつ侍まて流の来る雨か　菱高
小雨碓青殘くに鬼ふく　桃路
所とりさめ泉のミ多し夕碓　女志宇
江をうけて案まつ里の碓か　幽晴
松風にをかれてうつ碓か　卓池
達碓白を見にあるまの穴　漫々

木深しく閑ハかなかて小夜砧　龍人
身に負をのせて閑なり達砧　曰人
さすがさに庶る孫もなき砧や　武清
山低く村里夜もあり達砧　一柳
むらせに乾すのはくやうつ衣　東碁
丁鴨の砧しうる衣や　江戸　季道
もし殺史とふさつかそ砧や　伊藤　瓜衣
大泉の背を尾に小泉の砧や　安藝　丈巳
明る夜もか屋と長いか衣うは　古稜　方解
川寒る夜に沒ふむ砧や　小雪人
手にうれしくと砧の拾子や　李量

河山の月にそて砧かな　筑後　良代
小夜砧とても歩るら月の山　文蘿
有かれハこハ姫くしうつ衣　古笋
手庶て萬獨ちなくしや　華水
人先にやもあの立るかしや　蕉古
落る日に乾さへうすかなしや　白槌
荊夜のかしうはすも衣　保吉
かしつ今る日にハ唐も尺さかり　存亜
有しおよ人にハかりてかしや　士鈞
老か身の作り出しあらかしや　仝
人丸もかしの軟ハ絵さらら　昭丸

白ふれハ人にとらぬかしわ　米貞
おれハくの橋見て立るかしわ　完来
百姓に弓ハまるりてかしわ　年仏
山中や菓山子の親に時をる　吉牛
うちつけに沸らするかしわ　一子
立かしとの山松かれさしいそ　道彦
まもさぬ秋やかしの日和簑　大阜
秋風の背とるりたるかしわ　奇剛
矢にそ山を居しけもうくて立ほ　乙二
あれくて百年をかくかしわ　自然
立かしまハ七十二三　かれ　蕉句

○百三

題叢秋

自のたる山をうしろにかしわ　能子　石雖
今ともの人ハふるなかしわ　少海
みぞかよくて見るかしわ　也松
古里の秋をうけとるかしわ　素迪
田の青やかしにとまるもある　武秀　蕉山
かしはたるも村ゐる月の佳かわ　秋吏
小むかれに沈柳のたるかしわ　素琉
かふハやるこうしむいるかしわ　民瓢
家ありや壇のつるふ鳴子　瑰　蕉村
ちかまなの鳴子ろうして通りり　仝
引あけて松の目あや鳴子　瑰　蕉古

是ゝやぶ雲の蹴てり鳴子や　几董
松風のわとろくさむ鳴子や　保吉
り乱れ蹴是ゝはしぶ鳴子や　鶴雀
されしうて鳩を吹や鳴子引　又鳴
秋もゝや乱に落るる鳴子や　士鶴
蛛しさにあやりてハ引鳴子や　是篁
世の中や鳴子引てもまるらく　紫員
索交る白髪もあらん鳴子蹴　年仙
鶴くや雲にたくそて鳴子蹴　祥禾
鳴子ひく里にあり夕り声に風　道彦
山風やとその鳴子のむら雀　仝

鳴子からあらそへ風のうなり発　三河　巴湖
人はもこれにおはめる鳴子や　綾鶯
幸山の旬見て立り鳴子引　藁村
松風やあるこの青の彼にあふ　陳夷　梅其
山畑や荒もむしろもおとろし　白雄
山陰や誰鳴子ゆるの青　蕉村
ゑるきらし秋の日いとひに入る　存亜
辛のかけの秋やあるより鳴の青　蕎紫
ゑるといふものに入主実日や　一学
人のあれ業なりあるとこれなる　道彦
身に自分に跡さし歩ゐるなれや　寒松

漂　名　学の中の折手をたれし漂ふれ　近江　魯江
娘子のかをとかりと漂ふれ　董古
やうなれ漂ふれにたれし山路れ　伊勢　周務
打向しうを漂ふれ縄や人の上　白雄
山陰に是ハ来ゆく漂ふれ　幽嘯
焼　帛　焼帛の櫻の先に水菓れ　几董
落　名　行合てかゝる春あり落ふ　董古
帆のうゝふものに来かり落しふ　仝
漂るものハ鶏と来かり落しふ　甲斐　鳥我
階子田をたしまかり落ふ　紀ぢ　蘭國
自己の小町ハ果や落しふ　芋村

題蒹秋

おくの春ハ雨めぬ落しふ　仝
去てやつるまれ小田のおとふ　去路
小そなけて鳥のおとそ落ふ　一学
これ居に持るハやすし落ふ　斎人
あチ落ふるとも去るぬ銚れ　文角
落しかるとよそしし小田のお　布席
文己の小去くなて落ふ　東蔵
空　さく　うそさそ花や良持る帰の祐　陸奥　玉岳
うそさや地窪うしとて越に隣　道彦
飢　さく　精をはもこ百にかれハ飢さし　米英
暁のとつや持れて飢さし　如蘭

御　宮　集むしろや風ほすれてやすさし
鶴　宮　二百咲木槿と出て鶴をし
鶴宮の月消それ白れなり
鶴宮やこの蕊蕎を何におらん
鶴宮やよく青の手る桶小陣
小笠をしれ雅の菓の咲鶴宮
鶴宮の蕣形もつ名はす
鶴宮や生一ツ菓をころれ夜
鶴宮は鶴の長みのはしめれ
鶴宮や須の菓荒の新法師
鶴宮や夏草のしらふる

伊勢

一菓　閑夏
六亀　存亜
五筆　道産
月紀　長寸
梳閑　一菓
金境

鶴宮や木槭にうつる松の風
鶴宮や岡はこるゆる山の新
まふはまたなきノ火のあそれ
江十から酒のこまふあそれ
しもくとあそれ鶴のあそれ
月ひつはりて宮の枕れ
口はとへ庵はあその梅さく
あちずれず墨れ砂れあそれ
嫌むにおりあその獨こ
徒刺こけし雅のあるれあそれ
たく本しの実も白とするあそれ

梅閑　斗白
蕉左　仝
暁喜　白雄
岱青　又鳴
琢石　存亜
恒丸

洞樋を亂のうちゐるおきゝわ　完来
幻に子ゐ吟うさるおきゝわ　菊里
柳ぬしの語りに来ぬるおきゝわ　一学
おきゝさく米て花より西白し　来郷
ある院に養国召るおきゝわ　道彦
氣有の降しうゐるおきゝわ　仝
ちる色おのさゝさゝ国に尺ゆる　一葉
明さゝれりやおきゝの己の形　桂堂
白浪の瓦礫にあるおきゝわ　寒松
人の業てうれハやそおきゝわ　梅月
拙なし　於ふてりゐるおきゝわ　来説

明猿におきゝの花喚れなり　陸奥　芳高
戸にさけるそのおきゝの外簾　紀伊　葉思
子ゐるもんれなりふ　おきゝわ　備後　梨蝶
計もなしおきゝのむしろ誰をかれ　八十八郎　風宜
おきゝさゝや無にまかれしのゆ　越後　此江
二百月の末にたきおきゝおきゝわ　出羽　健水
井高かうしろ姿れおきゝわ　上総　百十
氣良のまれにつまそふおきゝわ　伊豫　里極
家きしりにしきを誉られて　枚長
家きし蕊りをたる牡丹株　石鼎
来にみるゝ月のちからも家きし　阿波　九花

秋　寒

寒いそや雨の山陰見て来るを　越後　呉洋
延ひし草ありて雨ふし　阿波　菅六
雄きくるや樹れ雨の糞　武陵
人事の月をふくそ雄きし　尾張　国秀
秋きしふれし波に寄り酌　古意
きしとて菊椒かく雄の氣　久滅
下　冷

下冷や心にうるの青　蘿城
下冷や赤坐の武夫深怒し　出羽　丈氣
遥としもるくてすきまし寄合を　紀州　枕山
身　入

身すしむや氣に七月七十夜　薬古
夜すらや雨の身にしむ板ひは　伊陽　意吉

題叢秋

秋　日

雨をかへす眺九月に雄の入日か　白雄
雄日和ゆるさしろんと通りけり　仝
秋の日の片つゝ着る山田か　豫石
秋の日の月に追れて着んか　存亜
雄日和ゆるゆるとおりふか　一学
秋の日や樹ゆるゆるて鼓のへる　道意
雄の日の雨ずにおのへ樹　猿　平角
秋の日の毎日着て出つゝ　岳稲
雄の日もしらぬ男紅松をかよ　幽晴
秋の日に着るともるく着たけり　常陸　隆和
雄の日の雄くなりぬ雲の着　尾張　梁意

秋　夜

子嵐のちくとはやあまの秋　蕉お
甲賀宮のしのれのかけやあまの秋　仝
秋のあや夜の氣ハ星よりも　白雄
夜のあやしくかるへし笛の氣　[illegible]
秋のあや月に押あふ松の氣　斗入
夜のあを人攪こしてゐりか　岱志
秋のあの見るてしらハ惠れ自　卧央
夜のあや雲にかけるる泣　亞　士詩
出かれハ来かる人やあの夜　樗堂
抵ふ子に拭ふれかりあまの秋　仝
秋のあを氣と云いへ雲の学　朱員

有の秋ふゝ出さはよるよゝ夜か　万鶴里
秋のあやはそりも果あ人の儀　長船
夜のあや世ハさまくの高笑れ　平角
秋のあの人を[illegible]黄火か　鶯笠
夜のあハたくり飛に寄やすし　由肆
秋のあも月うくなれハ付白くる　菱之
夜のあの歯にてさまりし帝王来か　陸奥　一秀
秋のあに鶴もろき山氣か　[illegible]　小濱
夜のあやたてちかれたる猿の画　外古
秋のあや出てそ見て来る彩れ松　三河　東雅
長　夜　癪持の起て飯ふ長夜か　百鳴

この頃ハ鼠も暮れぬ長夜かな　伊勢　李石
長ずおや寒りかる老の波いろ　蕉古
ひるの枝ふこうへる長夜かな　蕉村
傘に鼠のつなし長夜かな　白雄
長ずおや頃の白ひの手につく　仝
戸をもし月やも夜の角ん　保吉
葦の実にるりずれ長夜かな　長聚
学の夜のまも長ずおの見ゆるるり　白戸　梅英
長ずおと秋の夜とんふさつか　月化
鐘さへ以ことなくおの夜ハ長し　雄剛
京とうろ寒しかもろる長夜かな　如　應々

蔵かけや芒しらけて夜ハ長し　諸国
あり鶉るとそりことにいふ夜そ長さ　双湖
古以へ夢の往来やおの長さ　白戸　一雄
長ずおに片足かけて畠の人　下総　梶母
清人とす所光りて秋のあり　陸奥　祖庸
繚て折薪もおそ頃のあり　梅僕
きとるの中に立たり秋のあり　乙調
火を焚て秋もるけめる鶉あり　伊勢　汶多
鶉音に下むきれてや鶉　蕉古
むら花夜おのさつくに鶉鳴　鶯音
猫の目やうぶ鶯をなく鶉　白雄

秋あり

秋鶉

鴫

よし迷へ鶉のあきを道にさん　正鴫
見て立ハ鶉に相なる小簑が　仝
月あきに松されて知さる鶉が　士鴫
餅ふるゝの筆おや鳴鶉　道音
いち時に同の見てゐく鶉が　蓑寺
ちやみたかれ蒸しか片鶉　陸奥　定鴫
服をさまれ鶉や草の事　江戸　文國
鶉鶉月をみたまハ痩めへし　桂鹿
鴫立て秋天ひきなかめが　英才
人婦に鴫鳴て氣ゆゑが　白雄
かけ流に追れてゐし鴫の後　曉雲

氣新の鴫の隙まてさしにけり　孫石
鴫の乗て月さきしう来にけり　斗入
鴫立て詠ハ有引男かれ　大江丸
あり蔓の植来より鴫の立にけり　恒丸
おしかれて又立鴫もなりけり　士鴫
夕かけや鴫のチれけり鶉のあり　仝
鴫の夜と蓑るともなく蓑にけり　春織
夏桂に鴫の立りは春が　樗堂
ふるつある氣をさかれに鴫の鳴　米貞
学卯や杖にうたへて鴫の立　蓑笠
鳴鴫のかけかはかある帯かれ　蓑三

たゞめ略ハ氣にもあらて略の著
略に目のとゞかぬ氣にハ著る程
略略てゐくさむかるもある事を
略略てしまりゐたるゝ事
略たてハ下る者あり学者中
立略や氣うしろまもうつけ人
小田の略目を立ふとても見ゆる之
略の立あらに町の行縄ゝ事
はらくとさしむかれ略と略
見先ゝ略や氣ゝ事の事
学ゝる者の費火や面の略

大阜
尺丈
道光
子親
壽國
一葉
雲雄
常世之
三津人
蓑亭
仙芳

立略のあらはれもふりにかり
略を見て廣れハ左ゝ根かれ
自と氣中に略たつ久ゝ事
立略を立しともいふやとりゝ
ゆの苦もゐくこ立略程あれハまあ
乙ゝや陽りかれハ程ゝやし
蒸の氣内掛へて陽るゐり
新ゝ操る人ゐるゝ蒸かれ
蒸性て秋ハ沸ゝ来にかり
乙ゝの陽りハ達も見さりかり
稿頁ゝ 頁もゐるハ稿頁ゝ 達 ゝよん

伊豆 助董
浜田 呉洋
伊勢 壽樂
兼所
左節
涼袋
月化
寒松
陽子
左節
秋坡

題義秋

稿　省　若ノ代の子代の数ヶ毛稿　省　乙二
その後に書る山田の稿　省　護西
初　稿　初ノや後に其の形ヶ其の形より　柳所
初ノや並べてごとくはしいもの　女子代
初ノや芦史にそむく聖ヶ良　多碩
初ノやこつよつはそろ山の事れ　白雉
初ノやこ者ハ絆ヶ達りしら　岱士
初ノや二百月より此の葉　斗入
初ノやうしろ洲と有ふ者に　石葉
初ノの耳えるる葉光ハ　弗云
なつりしかまゝ初ノのふるつか　舎乙

○百十三

題義秋

湖の書初ノとまて紫により　士詩
初ノハ定とぶまその名之より　羇笠
初ノの書吹そつす嵐かれ　鶯笠
初ノや清の松を見るゆゑん　亜濱
初ノやこれも家の塀ほん　董堂
初ノのこまりにりや河の上　長寓
初ノの月すむ陰をまるるか　霞鶴
初ノを見送る朱の蟾か　卓池
初ノや裂ちを居る山の上　安藝　枝焼
松所は前にさまく又小田の戸　関更
二羽くとうそへて然し　丁一ツ　蓑古

玉ありと有人ハ蒼れ芦のア　仝
なれ男りハ立へし小田のア　白樓
いなしいまの姫ハ老なるかアのき　保吉
浮ゑ我又明あるかあまの丁　隣石
まるるア大ゑハあたかりかり　仝
アたとて田来に入し花次ゆ　去鴻
アくと鳴ハつあるかの原ゆ　斗入
己畑や沸しきりて丁一ツ　仝
丁の夜二ツの己の風かふく　存亜
浮雲のアまるるかきそやうかり　士鈞
十日保と蔵吹なてアのあり　仝

丁蒼ふあれ日のあるの原ゆ　仝
しら演へアの去て来る月花ゆ　恒丸
一のア二のアまるる嵐かれ　麦二
アなくや薄関めあのしまるし　柳荘
月にアまの有るまるあんかり　長翠
崎とはしかさるてまるか雪のア　仝
かるやもひとあれくてアのあり　栄兆
来るアのとりつぶるある橋ゆ　米英
蔵井のきまいあたりアのあり　仝
丁鳴や殺てまた見る天の河　万鶴堂
心あそれア関送る星くりゆ　仝

芦に丁ふくまたしいとさるこ　自死
まゝ手のとさるけや丁の五十日　乙二
丁の羽に松風うゑる流れ　合
家の戸にあはれしさや丁の夜　道堯
丁ゟ日や早のたよりもある日は　合
田の丁や里の人数はらふもへる　一葉
夕汐やまれをたいて丁騒く　魯隠
とまりて短くなりぬ丁の足　素檗
村舟や鵜は丁の下をゆく　長寄
丁まるるあやよく来る表来の大　寒松
山は村舟まんくまるる丁の夜　平角

題叢秋

汐先に来て荒れ乱り丁口又羽　庫人
川の丁一とをつりに荒れ乱り　雲雄
古里にたゞしまん芦に丁　薫百
たつりしいあらるゝや浪丁　同人
めれて来て月おとまつや小田早　漫々
世の中のうしろをるる丁の夜　一疎
村舟の後に見てたし一ッ丁　双鴻
山越る丁の新さに風くれ　惟平
夕波や山の出たりを渡る丁　陸史
風のなし芒の端に丁の夜　双鳥
山のとまし田のある絶丁ありる　午桂

子に木に火うつりうすし丁の事　筑前　吾来
戸口まで丁の糞あり八重屋　尾張　秋國
来る雲をまとめて見るや小田の丁　伊勢　一木
小田史て登かつ子もなく丁の事　尾張　可雲
岩の丁蔵来るうちや漣ふるつ　筑前　石今
丁なくや一もの松一本りつ　金境
鶴の史をふくそて丁のまるるれ　伊勢　寸明
ハ先もふるこの使くや丁並ふ　秋光
板や子に蔵来るまやゆの丁　雲子
訓喰も抜ふ屋ふ小田の丁　護物
糸道ふるにかるやまるりる　焼去

蔵　喰
小名　渡

まるりる雲のまるてのましまれ　華村
よりつまれ破山めふれまるりる　保吉
蔵岩のみてて飼れたふ小名れ　学笠
十鶴屋と鳴まるしやまるりる　寛松
たよりまま末学れ庵や渡る　其堂
文善ハ縄まも来るそまるりる　庵人
まるりる鶴のつりたそ見たたす　白瑞
うはしやからる渡る秋の雲　魯隠
豆売を延たにたくや渡る　鶯雲
笠山の石飛あれ小名花　宇橋
いたくのまれあしの小夜れ　右雄

掾　鶉　むらさきにさそ来たり初の風　、　古渓
ひとりみ殺のうちや秋の夢　　康父
ひよるにあれとられなり恋の人　　二庵人
陶隱　鶉　青さきに殺てるさのまたり分　　白ア　鼓分
小　雀　鶉夕や夢の小雀の門別を　　一葉
山　雀　山華や樋の先末に庵にはる　　華お
山雀や云秋もなしさりの夢て　　荒お　如来
山のこれ寒し夢の乳如の星　　梅其
四十雀　夢の戸とのれぬ事を四十雀　　左ハ　子殺
鶉の日の秋をさや来て四十雀　　諸陽
雲ひつ寒れ鶉ハなし四十雀　　古渓

鶉ハ来て夢の実こそ年四十雀　　梅卿
ひ日此や丘のつゝしも五葉すと　　護物
類　白　篠此や鶉の面をさやく類山　　庵人
五葉たゝ有と言へり類山夷　　寅天
類　赤　夕日さす杉や臣赤のこまり鶉　　白ア　柏樓
鶉　鶉　鶉鶉の言ちきて来や蔵の諸　　道彦
きずれいや人ふしたるもさす　　籬曼
せずれいの尾より罪てりの赤し　　倚日　光春
せずれいのちゝもうしぬ世るるに　　下臣　燕巴
菓　栽　むれ来るや菓いさしかのうつの染　　柳舟
咏木鶉　年前うけ書も木深し咏木鶉　　華お

鵙

木つゝかの月日おとふく木の男か　　[illegible]
鵙鳴て風猩ゝ木の男か　　周更
杉のれの〻ゝ含る鵙の国さしか　　[illegible]
義[illegible]卵の[illegible]に鵙の鳴　　白雄
[illegible]ゝ[illegible]ハ[illegible]ゝ鵙の[illegible]　　[illegible]
鵙の[illegible]の[illegible]に入かゝ[illegible]か　　春亜
鵙一羽来て[illegible]か　　菜兆
さし[illegible]して鵙に[illegible]れる　　乙二
[illegible]麦[illegible]し鵙の鳴　　道彦
鵙の[illegible]の[illegible]を都にする　　仝
鵙鳴や天狗の杖の[illegible]の木末　　月化

鵙鳴や[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]て垣　　[illegible]
鵙の[illegible]いつまて[illegible]の[illegible]る　　[illegible]
鵙鳴や[illegible]改め来るそとて　　[illegible]
鵙[illegible]や[illegible]木[illegible]の[illegible]　　[illegible]
[illegible]の[illegible]やゝる鵙の[illegible]　　保吉
左刀魚や[illegible]の[illegible]の上　　[illegible]
左刀魚の[illegible]ハ[illegible]り　　[illegible]
[illegible]すりしかへる[illegible]か　　周更
不[illegible]す人[illegible]しか鵙　　白雄
[illegible]鳴[illegible]の[illegible]の[illegible]か　　斗入
鵙[illegible]の[illegible]かしか　　[illegible]

鵙に贄
左刀魚
鰍

三日月をあ風よつて鳴りしかす　伊藤　其橋
秋深しかのあらもかれ泡　[illegible]　文鵞
沙魚釣　沙魚釣やあちに[illegible]の上　[illegible]
沙魚つりの小糸漕ゐる[illegible]の[illegible]　[illegible]　[illegible]
白鮭　[illegible]すし[illegible]に血[illegible]の魚　[illegible]　[illegible]
和鮭　さしめる[illegible]尾すれの鮭の[illegible]　白雄
和鮭やつゝめはそよく[illegible]の[illegible]　乙二
和鮭や[illegible]機のあるしなり　与人
[illegible]　[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]　柳[illegible]
百日の鯉切[illegible]て鮭　[illegible]　[illegible]

鰯曳　いましかけしや[illegible]屋もされ[illegible]　[illegible]松
小鰯や[illegible]の[illegible]の[illegible]　宜麦
小鰯や[illegible]に[illegible]に[illegible]も[illegible]　[illegible]
泡　鮎　泡よりもかろ[illegible]　[illegible]
押[illegible]て[illegible]鮎の[illegible]　[illegible]
鮎[illegible]　[illegible]　[illegible]
[illegible]　鮎の[illegible]や一二三の藥　白雄
[illegible]鮎や押[illegible]　栄女
[illegible]鮎や[illegible]　[illegible]　[illegible]
[illegible]鮎に[illegible]　[illegible]　一[illegible]
[illegible]鮎の[illegible]　木[illegible]

崩簗

山風やさも崩して簗の上　陽子

之寄うる月も浅瀬り崩簗　上毛 三巴

それとしか蛇の産屋や崩簗　丹後 麦々

蛇入穴

入奇や赤風ん痩る蛇の穴　護鳥

鹿

しれず淋しその尾ハ猶淋し　柳荘

おもすゝきて暁のしれず　樗良

しみず亦あそ尾ハ河を越来る　多稀

おもれ子嗅おも寝のまゝしれず　関更

鳴止てしばらくつり音月わ　仝

松山や夜半ゆ? しれず　蕪村

めわしかれ夏影の月の光か　暁台

しかの声尾ふゟ来れる乙　仝

山家の鹿ハしのびゝるわ　仝

聞れたへて酒酌ハ月しかも鳴　白雄

ゆくしかの霧に声きこえわ　仝

恋すゝるしかや杉の枕も　蓼太

おもしろうてなけしかの声　仝

三声鳴て聞ゆる妙しかの声　乙

しかの声や京へ一里と松の中　嘯山

寄きりれをはすくなりしかの声　保吉

恋ふして苔ふむるをしかね　几董

鳴しかのぶり比の声しわ　伏士

しゐ叫といひて賊く衆にかり　一　芋
しゐの音れ袋に桂に入れ　仝
周れそと杉れ桂に蝦のしゐ　自紀
叫しゐの二音に蝦を見しかり　冥々
あすはする松の法よりしゐの事　尺芙
有れはしゐのあれるとや　自花
然猿のうてうけよりしゐの事　道光
花を見ふむしゐて豆さへ叫れかり　仝
しゐの音に自さしそへて淺れ　仝
夕山を下へるしへてしゐの事　養地
奥山に首を入てやしゐの事　素榮

自に叫しゐそは此の杉れ　岳稲
之鶴も屋てりゐ蓮のしゐ奥を　乙二
住しゐの夏は秣に前れかり　仝
ひけしも屋をて見さうしゐの角　堀前
弓張の月そしゐれ命　あれ　素卿
てうしてまるあり之月のしゐ　雲雄
しゐ叫て眺められかり蓮の山　瓦金
夕陸にしゐの起り木鶴を　庫人
叫しゐのおしさへ雪の定るしき　桂堂
杉ゐれを風のすくの起しゐの事　寒松
むつまやしゐの手枕　足枕　一葉

しかの声又ひとりとたつ人あり　鶯笠

捗しかのなきあして来る畑かな　蕉雨

鳴しかれこゝへ寄る子は疵うまか　護物

良捜く野々河難しかれ露　秋瓜

蔓の絶のうれけハ舞ふやしかのこゑ　漫々

しかれあとわかやれ草れ乞きめ内　幽嘯

宛一付あの影ハしかの鳴聲哉　秋麿

しか鳴て月ハ落たるなり　筑後 其柴

萱のしか縋く聞て通りけり　同人

しか聞てすくしと思ふ人のよ　葉也

しか啼や笠呉てすゝむ旅の道　伊勢 鳶翠

しかの子の背にぬれたる雨かな　越后 闌古

しか鳴て松の氣上見なりけり　一蕙

一節れんや見えてしかの声　柑翠

さゝしやや月も光もあれぬる　双鴻

あしきれ里人ハ秋のしから　雑嘯

鳴しか子の付角ハ夜もちて　旅鴉

しかの声枕ともつてはあら鳴　古彦

恋しかれ波をふりて戻りけり　出羽 祖六

白のもる雨を聞たしすしかの声　嵩笛

眠らけハ山のさし出しかの声　求一

大風の夜の月あやしかれ声　但馬 寒秀

あちらむくまれやまやまのか　因幡　南溪
ほりゆくんをしかれ以れなり　筑前　李仙
戸をさして老己まをんしの事　駿河　良岱
列て来るしかや無する良てなし　文國
しかれ事うまの世ハ狭うまれなり　陸奥　芋坡
あまり来て清れ退れつ晩のか　河内　雪丸
旅なれと家れいれなりしの事　左節
しか番やとへハむ年け男之　瓦金

俄然發句說叢雜下

九月　蕪の実れ吹ちる門の月れ　武蔵　雪左
庸去も夕暮れし月れ　陸奥　石丈
いとまさへあれハの月のさとさん　美蓋
ふて来るアれの月のしまりれ　瓦斯河
長月　長月の秋や小松も花に浮く　道差
長月や春をとまりし小田の路　万和
長月の昼れさしさや演庭　護物
長月やいかれ月もさく菓の花　秋拳
重陽　菊匂日和をふハ雪ずれ酒砂ん　都雀

桂丘左節拝

題叢秋

ふといふ日も菓にたり菓の心　　照丸
酔を買に来してけり菓の物　　仝
蒼ならに月出交ふの小菓や　　伊勢　又蓮
ふの菓殘まそや戸を傾かし　　[illegible]
菓のりやよしろぶ山に酒の餘　　仝
押よきて打げと菓咲れ月や　　大阜
星れ雪菓のやりにも朱にたり　　乙二
弓の尾も菓れ　たりまれ　　仝
白菓の名に打ふ九月れ月や　　兵猪
ふありて菓大ずらそ作りる　　寿岡
九月も山家に華なり菓の心　　等老

菓のりや菓にふるふ物ゆくは　　魯源
いへ出てふ白菓れあるまる　　蕉白
雪ハ菓に物良頃れ　れ月や　　学笠
一日ハ菓れ夫に来る簑ハ乱　　庫人
白雪れ我宇にたりぬらふの菓　　布雪
白菓の中より明しれ月や　　庭実　天民
乾さ千本酒もふハ菓の名　　越中　周泰
菓のりや打れもよらぬ時の月　　江戸　文翁良
菓の酒呑まれたり菓の酒　　加賀　覚名
菓苦勾　糀も木に飛りて栗れ苦つや　　青牛　史前

後雛

おもかしよ姫おもり居の雛
身の秋に逢ふとて志しし居の雛
菓もなめ子のなき業と枝雛
雛まも菓のかきを殊菓をかしを
白菓と書れ名ばん浮の雛
燈の灯やてらく光る雛の玉

菓合

菓あはきまにいろくかなりけり
夏菓をこなり見まんかメ也
猿菓れ雛とてかれなりけり
白菓やまきらイよする人の裏
いてさしは投壺まいらせん菓を

一菓
羊虫
天府
華村

百廿六

頭蓋秋

を焼して色失へる黄菓かれ
よしや菓いそぬ色まもるよしれ
菓れおらず無の人のはかりけり
山風や板戸倦るし菓の上
十日迄に来よといれけり菓作
花越るゝ白れけり岩の菓
菓の色にそむくんもいてる之
黄に咲あ渦おろしゆく口の菓
丸盆に白菓をとく白れ也
左刀持の脊中に菓の日向也
無色に八日の菓を見せけり

合
蓋左
合
焼菓
百鳴
関更
白雄
合
几董
合
合

薬の出れ白粥とむる虚也　保吾
咲こちて薬薬しけれてるる也　仝
白薬や多あるその名さあ安し　不明
京将や人のこゝろに薬の花　仝
拙拵てこしも白一薬の花　岱喜
尾花拵て白薬見ゆるゝ也　仝
庭薬の咲り来て奥房し　花縣
白薬の白ゆ殘ともなりけり　藤石
月花もこれ白ずくのゝ也　斗入
流ず房ずいそれす薬の薬ゆる也　存亜
雷地一輪の薬れ上にあり　大江丸

薬咲て秋ハ大るれ来れけり　羅城
赤の残る雪に白ふ中薬れ花　旺丸
あらすまし一本咲ても薬れ花　仝
白薬の酸ず屋に白し雲れ鶴　祐昌
白薬の白ずに女の来さりけり　為貞
むさるに牙ハ花これぬ薬の花　士鶴
花ことに薬まもあらすハ重薬　仝
白薬の山路まれぬも花之　仝
白雲れしらてありしの黄薬也　仝
鶯の足青さしずくれそれ　樗半
薬の出や明れハ古ず現　笠　雲蒙

菓の句をにうちあて自ふ　之　寄閑
菓作書に書しまゝりもなし　蓑れ
白菓に書へハ寄ふ是之　素楽
寄ちれと白れハちれと菓の　境前
物是菓の是をさむ狭れ　瓜坊
白菓ハ唄よりも之字の　一瓢
風日の菓にそなしよ正路れ　掛堂
句のそゝ寄申菓の白れれ　雪堆
脊の寄よ菓作りなり松の寄　嘗笠
れのふりに架ハうりなり瓶の菓　蕉白
大そハ寄よりの之菓の秋　三津人

白菓に口得きりれ　合
秋の田の芥ふよぬ菓の　荒和
きくもいつ綱そて見る物に迄　寒松
咲そめて外まさしなり菓の　卓池
遠くに書しまそのそ菓の花　合
白ゝれハ菓まもよふや京古所　護物
寄に出る男も菓にあるしれ　干當
菓にゐるゝれの白まに成りなり　宜麦
笠変て見ゝ此ハ菓の正路れ　養言
いくの菓書るゝ正氣れ　魯隠
白菓や木鉢の中に這なる　漫之

山路来て菓の香ふ心狭れ　桐揚
月よしと見れハ白菓たゞはなり　女志宇
こゝかしこそ見れもかけ手菓花　仝
白菓ハ上手めかるり花の出来　芝斐
白菓れ力一ぱいに咲たり　米彦
人の来るたけれりしや菓花　机藤
秋の本をてらはしら手菓の香　雑啄
花ハこれ白菓れ来と来たり　山深　芦丸
牛来るや勿弃るくも菓れ上　女志宇
手折来る菓ハ白れ布の奥　甲斐　作充
山笠ハこゝ白菓の月　尼志月

おとれしかもや山路れ菓の香　俗中　文里
撰屑の浮世へ出るり菓の花　秋左
山あるめ菓うる人の渡る道　白考
松竹の冥利も知て菓香　机尼
見る洋の菓これ花のあるしや　文道
菓冬より菓に名高しこゝ並　玉河
菓の香の白湯まもこゝる戸口れ　桂丸
人去て遠かけさ手や菓れ花　斑事
坡の花めるはハありけり菓香　木老
白菓に隣まてあるこれれ　尼鹿　應汀
年のしまるはの著せしや菓香　珉古

菓の花奈れる人の中殺し　斗牛
寂ハたゞ在ずにあるやひの菓　下臈　鑄〻
ゐるもるて見たし菓の花　伊勢　易作
白菓の沸しかしたり見る人　文喬
造作なく菓に有る心殺や　俗中　芦洲
大菓や咲かさるりて横目さす　桂心
ふ鳥の集ゐまても菓の秋　茂女
ありこれし菓咲ゐれやすもある　陸奥　卓堂
子ともこまりたにすさらん菓の花　但馬　雪涯
家にゆく月日も来て菓の花　唐語
いろくの菓やたゞ七小町　紀志

○百卅一

菊英錦　ずき殺や花り菓の花の良　埃英
十日　菓　冷さはや十日の菓に碎る良　越は　竹童
かさまさやかすの花かさ菓の露　我志
腹さめやかすの菓のゐるかしお　可勢里
白菓にあるしかりかつ十日や　道堯
殘菓や家ホかすまも殺の雲　常笠
初五夜　崎風やり和簑落て初五夜　去鶴
人の世や花ろかす夜の初五夜　保吉
初五夜蓮蓉夜の便かれ　布永
初五夜立かれハ見ともさきかり　存亜
来て見れハ下夜ハ遠し初五夜　麦宇

題義秋

松のことなれしひに初五を
名見の浪の服を初五を
五を見ゆ良しやくと風ふる
物の木そ所そら所の薦五を
ちらふと来きふてに五を
五を見ゆ用をりしこと傘二本
ひつち因に五を蔵かる夕日を
人あしの踊りちうる五を
松的に下りむくらや素五を
浮やの五を に生る尾上を
夕五を この河下は薦かりし

但子

木卯
湖中
閑更
合
百的
華村
合
華古
兇家
白様
合

題叢秋

そしりに尾上の五を殺れかり
著いそく今の新さへ五を
新たのむまての槽も五を
ひかけの志つかに乗る五を
薦五を梳さ手る子はかるぬん
弓横て一里雷ふむ五を
五を生て池を手る小道を
今手日の素遠通る五を
二を三を日の乗りたる五を
筏さ手人うやすし夕五を
来ひして河から見たり夕五を

常座

保吉
岱書
合
又遠
素的
重厚
祇恒
大江丸
存亜
恒丸
素隊

ゆしもりも苗をたゞるやうしより　五筆
夕苗を来にける人もうりけり　道講
鳴り来れハ名にしらしく苗を来ゆ　士鈞
見つゝ居れハ氣に入ぬ濡苗を来　丈左
素木つむ里人古き苗を来ゆ　白麻
薦苗をよすゝ蹄の青の実ゝけり　樗堂
古器の唇にはゝ苗を来ゆ　米英
苗を見ゆや薦雪ふる拝屋　菊里
灯ともさは松にあさるし苗を来ゆ　仝
すきまりや苗を遠ゆる家の青　道彦
てにあて狼よすゝ山ゆ夕苗を　蓑虫

題叢秋

白雲の来ハ嵐の山苗を来　自化
さをしかれ行清掃ふ苗を来ゆ　一葉
横雲や苗を来れかけの薦苗を来　寄剛
あたゝかにうりて日暮る苗を来ゆ　蓑笠
山道やえも出れぬ木よてむ苗を　寒松
この頃ハ暮月の暮る苗を来ゆ　雲瑾
世の中のふまくにうる苗を来ゆ　伊勢　翠川
朱さくく女しほしほに苗を　掬鳴
苗を来ゆり木を中の楓苗　跡山
雉ハ泣つ苗を来ゆ木のこゝ風　京　芹坡
氣高の雉をもらはゝ苗を来ゆ　俳中　天蓮

立退て見てもなかしむ　五十六　洋法　植山
五十六　してたしかなりの月あれ　石河
人の事のへる程と赤ぶ　五十六　夢南
老近の山のまりやもらる　五十六　坂中　遥々
五十六　見て踊れいそぐなり　玉光
栄通て於其の所　夕　五十六　立接　之道
むらる　五十六　何あらしてふるや　白　柳起
あやまつて風にさもられ　夕　五十六　路寸
夕暮をれぶらけてあるる　五十六　丘黛
井つるふ山の白ぶる　五十六　坂中　魚舌
ゆ　悪てもなかりしうるる　五十六　一橋

○百卅四

蕎　五十六　氣なるに動くも淋し蕎の白　加賀　基化
名をまるぬ事のしつゝ蕎　五十六　午仙
なしめらる見てある蕎の　五十六　雲橋
久すの見つけるやに蕎の姫　茅丸
櫻　五十六　雲の碓出て櫻の　五十六　坂中　風吹
柳　五十六　柳よそ薦月は名之なり　恒丸
櫻　五十六　晩陣の名ふもとゝ手櫻　五十六　大嶺
白猿木　五十六　ちりうるゆにぬるての　五十六　員流　古流
漆　五十六　五十六日和あるに流るとうるしれ　不知集
合歓　五十六　藥なる湯ほしうるや合歓　五十六　護物
柿　五十六　みうぬにハたらぬ事のそ柿　五十六　柿唐

題叢秋

橘千年　枝千年藪とふかり山おりて　春亜

子千年　子千年松に子ゝら千歳もなを　長翠

まさりし妹が娘や子千年　寿岡

鶴の子千歳も千とせ　与之

夕暮の松かけある子千年　満中

千年且数

色たる八千るあり月の夕千年　丈左

今数ていく兆千々千年かな　完来

不変々松

更れすて旗れ逆なり松のを　祀女　加十

千年ます遠く子松の男ぶり　堤女　柳川

ふんまへて々々之峰の松　尊左

深山の中にたち松ありけり　和鷹

銀杏

葉を染めてハ冷たし垣の松　鷲溝

銀杏よんでしつれ咒の下山かな　尊雨

夕暮や鴨が待ちる子の宿り　胡兎

丹山寺

丸きを中に木山の寺かな　尊左

いく數も載し緒あり丹の寺　尼　練丸

末枯

末枯や辛かる月見つる深の木　尊雨

末枯やさし日の錦に汀渡　江戸　米仲

末枯や月の色より日の色　尊左

末枯の中にさゝえ教子哉　京　一山

末枯や弾ま栽もせのくく　自悦

末枯や花りんとてる鴫の段　暁台

志ゑれんとするやもありはの日　擇良
はの日あらず書ざや井か　仝
廢りにはまとの雲やはの日　左傳
はの日すぶこちより寒ゑる　晩垂
川ゝやあ三ゝおりてはれ日　蔓古
悔つゝぬんにあらありはれ日　仝
晩はまとの雲やはの日　書蘆
老ずはる人は絶くはの日　白絶
はの日松はゑ年ぶ来の東か　弗云
はの日演手の小橋尺ゑ　存亜
人の身にひかりむしんはれ日　石蘭

れくと菓草の匂ふやはれ日　昭光
松に鶯はのめしたりはの日　仝
はの日にかたも古ぶ紙よりし　猿古
はの前の義物来や日の友　士鈞
はの日丁大手に鳴車か　米英
はの日むする匠ぶ横ちる　書繼
ふまくにかゝる秋やはの日　完来
はの日長ずとしの氣か　白虎
はの日海れ来かても名跡か　蒙罪
はの日ふゝ見ぬ山を道のぶ　仝
たかひたることもなかりはの日　葛三

月ゝ月さへそれたけ老て後の月　月化
ゆゝ見てもこの夜ぶかありの月　一学
るゞまの花こんこゝのむ後の月　乙二
うなゝめ秋の木立やゝ後の月　葉丸
ひかけりちれさくおもりの月　仝
後の月山里ちるゝるゝ　道堯
後の月片丹おしこゝろ　仝
後の月ゆゝ着もろゞまれかりゝ　月花
山越ハこよれのゝまよ後の月　持堂
後の月喜捷松の宮れちる年れ　平角
自然れ花もつよしは後の月　素楽

みれそゝく山れそゝくて後の月　仝
豆引て光のさゝお月見ゆ　尊隠
鴨まてゝ立て古ゝの後の月　申寿
月ゞ夜子寺ゝ売まも信れ後の月　雪笠
後の月そりしくもふけぬゆ　重松
後の月そゝの心まも捨てある　蕉白
泡雪のゞりんて来るゝ後の月　庵人
今夷ゝ古ゝゝるゝ後の月　幽晴
さゝと手流の力や後の月　菓也
夏のゆりれすゝ月を見るとすりゆ　冥也
十六夜夜の来ゝ月を小雪　猶夏

平家おもしろうれたりはの月　李尺
橋のもしろいつらやはの月　竺翁
執たらめかけの安さやはの月　對馬　戴璞
よそりしはれ月前の花山　筑後　東藤
ゆ子の苦こそしこそはれ月　里麿
洲さのたらめ明家そはの月　路丈
としの寄ることさいたりはの月　石見　碧風
井をとて松にはたらすはの月　長風
あつ家の横ぼうすあり十三夜　蘆古
よりる事てはり来よりて十三夜　菊村
虎去へきし吹松へ十二夜　代宗　自得

梅いろは田にたつ人も月見かな　士鶴
名をよへはあれとくるす十二夜　米英
月さへも花は友なし十三夜　不寒
うらも又月の前し十二夜　一子
明るかをいさよふ雲や十二夜　素榮
まれ子に雲はかりぬ十二夜　全
実さて屋手なのむしろや十二夜　里斐
とりはれつ松のやしすや十二夜　観之
明石の前てこそ風十三夜　都賀
鶯の母子教十二夜　古節
豆名月豆いて兎のきしす月見かな　魯隠

早稲酒にそのゝゆうしぶ左いかれ　白槌
秋の葉も茎葉とろりて新酒かれ　尼諸丸
蕎の巻にて醸ふ新酒かれ　栢翠
見ぬ鳥ゝ鳧鳥をんとし酒　甚堂
頃越の咄あれなりてし酒　文路
濁酒　隈るまきのゝ心もの紅濁酒　蕉左
温酒　秋の夜やあらしめ酒に手のする　陰夏　調陰
雲れ月に酒あらしめる葉火かれ　調真
木蹄　蹄とりや犬を乱路に追疾し　蕉村
里ハ七蹄あらしぶ白和かれ　蕉左
山陰やてゝすむ人の蹄もふく　乙二

栗　荷栗や翌の氣も山の奥　青蘿
毬栗の蕉にとまるあらしかれ　白槌
いけ栗を人ふ茶れそ回舎ふり　保吉
栗ひつ振りて丸ぶ子のまかれ　又鳴
刈あの栗まも忍むや山の栗　道彦
荷栗や日の入まける山の口　護物
山里や橋も通さず栗子ひす　一蕉
荷栗れさらや蕉りやるの雪　花叔
園栗　どん栗れこゝろあふたり窪ひまり　杜手
推　牛の子ゝ椎の実蹄にさきまん　白槌
いそうしやこほゝ椎の下舎　保吉

柿

志のれこそさうてほうに後も来れ　朱員
柿のこの夜初てより雨の白　加賀　半日閑
夜柿の青分にそはすやかくり　尺芙
多しさや柿拾ふ日も白のかる　大和　嘉樂
柿のこやかるの鳴あり閑るあと　七才　鞍丸
その蒸て付めく柿の木末か　蕉之古
山里や稗売こゑれ柿売し　保吉
鳴に来る山鳴をし柿の色　樗堂
柿の色をこ松もそこへ入る　如毛
柿夷のいとまゝ乞する日雨か　菊三
人の来て後ぎは夜手雨の柿　鶯笠

熟柿

柿の木に階子かけたり二日の月　卓池
夕てりれすつと這入や夜の柿　梅月
柿ひつくへ接るる鳥か　陸奥　沢鵞
高吹してそ柿ふへ山鼠か　國丸
熟柿すふ老とりかり人の鶏　鳴之
柿の甘こゝへに雅よく付花か　巍道
沢柿や遠くそて見る人　京　為文
沢柿や箭押ぬそふ山かくす　白礎
沢柿にかゝも着りし鳥か　二柳
沢柿や蒲もへてをしつける　菓兆
於田姫の人をうしや柿の沢　子孫堂

淡柿や[illegible]秋[illegible]
淡柿にことはを接る心か　方永
[illegible]　里[illegible]
蜜柑　り城のさやかな蜜柑の木下か　久臧
の[illegible]毋　[illegible]の[illegible]ほの[illegible]の[illegible]ぬ[illegible]
令柑　[illegible]柑の一[illegible]ぬ[illegible]
[illegible]　[illegible]人
柿　柿[illegible]の[illegible]の[illegible]
柿の[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]の[illegible]
柿味噌　[illegible]柿[illegible]柿[illegible]
[illegible]の柿[illegible]　[illegible]

柿[illegible]
[illegible]　河内　一[illegible]
柘榴　[illegible]　京　宜[illegible]
榠樝実　[illegible]　伊豫　呉天
梨子　[illegible]　大江丸
[illegible]　陸奥　獨[illegible]
[illegible]　去[illegible]
柿　[illegible]　一[illegible]
[illegible]　[illegible]
板実　干[illegible]板実[illegible]　下[illegible]　[illegible]
・　[illegible]　[illegible]
桂実　[illegible]　[illegible]　[illegible]

菩提子　ぼだいしや人なぐ所なる　井眉
茱萸　茱萸の本れ志ゝられてたつまたるや　兜金
殘心や茱萸於ふ子の神狭　白雄
心茱萸に身て所たる小名や　士鈞
常ゆゑ茱萸まてゝゝふ爲や　乙二
小兒も茱萸供にあふや茱萸の陰　陸奥　十升
南天実　南天の実やそさまりし物の中　久臧
心　榊　枚伐りし義のもとゝや心榊えむ　可慶
木　実　於ふとて木の実車にのせられる　丈左
面上まもるゝめ木の実の嵐の歯　幽嘯
花心の榊まもるゝめ木実や　伊豫　白雅

○百四四

題叢秋

梅　嬢　折ゝてゝんこほさし梅もとぶ　兼ゝ才
梅もとぶあるゝ人に花を買れけり　白雄
こんな実ハいゝてもあるに梅もとぶ　存亜
身ひつの故に居ゝるや梅もとぶ　雪前
よい花にもとれて新し梅もとぶ　漫ゝ
同しくハ心のまゝ所を梅もとぶ　陸奥　風虎
常心実　常心の実こほれ初けり夜の日　魯井
子　実　子の実やすゝみなりて夜もとれ　伊勢　是風
牡丹根分　まける根に秘臥すゝ牡丹や　去鶴
煮　子　しのふ子しのへと新に秋ハ来ぬ　素能
しのふ子忘子よりも花なり　冥ゝ

鶉　鶉の声てつまむかれわ　蓬寸
鶉啼や宿のかけ目のわれ残す　暁雲
おもひし鶉啼るを流来る　乙二
かんなりの花にも咲ことさへかし　梅仙
思草　おれ草を葉末のはれ印し　傳中　季秋
万年青　あらけて実を守る草先母子わ　白兎
吾亦紅　木の間や白の端あけれこれから　杜影
さ秋もこれもうつよ見てるぬ　自燒
これもうき名のうちや花にゆられかり　漫て
吹風ハ霧にふれかり　抱榆　盤ら　又貫
芦花　芦原むかりのつきくもの道　讃栖

いまそれけ花ましし芦のふ　三及
芦穂　さもみや芦の白穂にそよそる　白梶
芦の穂に星そられすわ　道差
蕃生姜　東叶ふ女や手にくられ汐のる　白梶
豆引　月かけて月あれみいなれ豆畑　表丁
豆　末やまれまや手と抜きる光わ　枕山
松露　初茶の引れまと探れ松露わ　早乙
茸茶ハ休ゑれ松露ハあるり成ぬ　紀州　蕉ず
松かけや径に折る松露より　保吉
松かさし松露をとる庵の折ハ西し　士鶴
松茸　松かけきりのまれ守し旅の人　李晩

茗　茸　茗たけや茸しいのこと見てゐる　几董
茗たけに心ひしらぬ茸生れ　白雄
やまされてこれ茗のよのことわ　貞佐
羊肚菜　捨てゝ子ホかる迄世かいふち茸　常笠
初茸　初茸やまはさい獨采にゆるへく　屠龍
靈かふり　茸ゆるたり人見ぬ秋の雲かふり　丈古
ゐ　糞茸　大茸ゐふんも何きゆるかり　一葉
枝茸　見るゝれに木のきへへりて枝茸　久藏
毒茸　人をとる茸をとして茸しよ　一葉
菊　牛　菊牛やあるゐれいてきのゝ中　女子代
たけ牛や牛の荷しゐる人の貞　薩ケ　三桃

るつりしや机茵ふくよのこと心　白雄
又とるも片コれ月の木のことわ　又明
此しさや菊のかさの庭たより　道彦
たけかりや人のしきりに道かゆく　月居
たけかりや塔にやうにいあるかれす　梅月
尾越鴨　日や茹に尾越の鴨の後白よ　伊勢　花賊
初鴨　初鴨や田ハふきかれて浪の上　左右　李堯
雀米拾　拾と米でも踊れ　ゐく　雀　蕉白
拾にゐる貞もをす　演　雀　古節
茗東鍋　多底に故ハとゝいて茗東鍋　越中　竟塘
硇代歩　硇代木に歩辺やまる新法師　鵜雀

網打のうけ拡子やまとのは　美菓
露踏麻　花麻や露れ花に浮見つ　南覚
めりくと露踏麻の骨なし　玉江
宛　懸　樋井をのこりありや宛やとれ　都者
露　露　露の露に雅し者の笠　枕　樗堂
露の露やかりくと漣つゞおひし　長寿
露の露や小夜の月の甘藤（サトウ）売　護物
露の露や古に枕込む茄子売　鶯笠
露の露や者は常の鶴屋ゝけ　自考
露付白　その青秋は露さへしそ　自雄
火とれしのはしもふてて露付白　合

立飛る雲まも露に付白也　雁城
鷺道かゝつて露付白　漫々
梨のめれてまりかり露し氣　鶏湖
芸中の氣は俳ろすむ露し氣　逆宇
あるあの梳麻まも松て露し氣　静山
麻しまの芸ふそこまも露し氣　佐ひら
秋　露　夜代は氣はさし笠秋の露　米英
百姓のまゝ橋に胡の露　月化
踊光とうらはれし秋の露　岳駱
胡露や蔬のやうられもうう　寒松
秋　白　秋の白胡弓の弦にまゝ夜也　暁意

題叢秋

蕊のきやうもそらぬ雄の句　白雄
歯をもらし老の蔭や秋の句　大江丸
井の実にあらむ垣や雄の句　又仍
のしこまる猿にやふらん秋の句　存亜
秋の句打ちれ出してそ酒を和　蕉左
俗列し笠こそよそれ雄の句　士訥
こんな付鶴も老らん秋の句　恒丸
折まて句ある秋の冥ゐ和　仝
木さけのさりしうまて秋の句　浙江
鶯の花ぬゆりし雄の句　畏孫
今初る服薄是るる秋の句　尺艾

耳にぬく学難の青や雄の句　道彦
検校の婦井手ゐる秋の句　仝
旅ならも句浪秋の山辺和　去翁
鳴蓮の末深さあるれ雄の句　雑家
桜の木の色とつうるや秋の句　柑裏
京鮑のすれぬるや雄の句　女演蔭
秋の句猿打ちてゐく鶯和　菓場
雄の句てがしれむきる鹿父和　菓山
桂翁の蔵木うつりや秋の句　三河流芝
身をうらむ鶯の形と雄の句　浜田丸玉
秋付句　遅田州夕暮人に付句なり　李石

おもひ沖秋も時なるとなれたり　又得
陰こそ年なのなるや葉れ上　希云
なのなる月なる光加れたり　春亜
秋の夕　蘭藤にのぼるも見えて なのゝ夕　蓮古
そたれさいあのこゝ春しなのれ　仝
あちら宛に隠も立たり秋の夕　黄村
牀しまに杖まれたり秋の夕　仝
蒔なりて人に見えて なのゝ夕　白槌
幸のつけいるも通らず秋の夕　仝
書のあのんにしむや なのゝ夕　鶴光
鶴を常ふ男こゝ所し秋の夕　保吉

題叢秋

なのゝ夕の入りもすゝぶや　岱吉
蓑よりそたれ出る秋の夕　斗入
行といそ人そのいとん秋の夕　白圓
人しられそれ名ぬなり なのゝ夕　珠石
子の鳴や所生ゆの秋の夕　恒丸
海山や月をふさいても なのゝ夕　仝
秋の夕おりしろれは面白し　松兄
あれ見るこれ寄さそ なのゝ夕　士鈞
よい月か出せしまるそ秋の夕　仝
りの夕なれ日ハ子なれも なのゝ夕　仝
たましゐとしよりつゝる なのゝ夕　長翠

この頃の夕まも雄の夕や　撐堂
雄の夕の明れハ松ハ夕られ　仝
松原薪こるゝより雄の夕　菜兆
雄の夕素先のし雑子ゑて　丈方
秋の夕一本長ず有毛や　青岱
椰の木を二度も出て尽る雄の夕　米員
茵松ハ松にいつゝる雄の夕　仝
撐まらし人のうしろや秋の夕　菊堂
猪の道らハ松ゑれ雄の夕　子共
志多やあれもいつこの秋の夕　一子
雄の夕笑ひ上ニハ笑ひり　坪谷

意れこゝやかて久しかず秋の夕　岳雅
ひとすきこゝ又ひとすきこゝ雄の夕　良茂
撓すれハ足をよりそ秋の夕　仝
却江を見て人ハ落ぬ雄の夕　東楽
氣たてる燈を人の秋の夕　蒼虬
雄の夕黄火に氣の見て初る　道彦
一蓋の笠逸やれ雄の夕　箕々
うら風や急の問屋の秋の夕　董堂
雄の夕孝りうらぬ人ハ寄し　東郷
秋の夕走ひ松をあるし　桂堂
雄の夕うるめれ灰をまゝらかる　重松

松かきを人の送りぬ娘の夕　少汝
うかくと人に生れて秋の夕　一葉
明娘やそふるりても娘の夕　鶯笠
娘の夕山見て立ハ人もたつ　雪樵
洲しさや蓋板落る娘の夕　蕉白
を山や猿のあるりに秋の夕　葵子
越て来る山ゝ風なし娘の夕　方明
却てこの気なも秋の夕　庵人
立あるるのちかや娘の夕　卓池
明日ハないやうに来ぬや秋の夕　呉老
有ようハ前向をされ娘の夕　桜石

花に寒ぬるのんを娘の夕　花は　双葛
糸の相も見てやれ秋の夕　朱頭
長明の尾のすゝきや秋の夕　玉河
折りしろすきの出ても娘の夕　芸洲
夕夕の娘や人にハ人の夕　娘兎
来清を仕舞渡しや娘の夕　秀朝
立むかふ松そのいろ手秋の夕　李喜
秋のりゝ誰か牙の上そ踊か明　桂丸
あふ人に手とハるや秋の夕　吉白
娘のりゝまの花をハふに れ寸　桜はか　蓑清
むつよしい清に花ても娘の夕　丶　菓来

秋声

しかハしか月ありての出来て鹿の文　左節

あらきたる月に別たる鹿の声　盛吉

山里や声すり流るゝ秋の声　半入

声ありて聴鴫ハ見ぬ鹿の声　梳左

月の出てもたゝ力るし秋の声　樗老

草の名をききれハ小念し鹿の声　揚英

夜六声鶉をきゝろや秋の声　意白

小がさて気因出す女鹿の声　長翁

月見ても声見ても声ハ秋の声　浅河　花桂

されハとて子等も鳴す鹿の声　高静

秋声

荒海や波をさまられて秋の声　睡人

くるとまろて鳴さかり鹿の声　樗良

百も打ちしおて秋の声　蒼虬

みれそふや無月秋ハ雲のかけ　木州

光るきこてり之鹿の声　蒼士

鹿の声くあれる尾上の米に分り　几十

山賊に落てり之鹿の声　守月

静なる山ふも居し手秋の声　橘ノ　周家

秋山

山人すむと人の之鹿の山　盛吉

すんふりとり暮て見ゆる鹿の山　合

鹿の山謂て書るすまるゝか　文河

是てもうれめてまのや鹿の山　葵二

身を抱につゝる泉あり 姫の山 順丸
枯て久しく松こそこゝかれ 秋の山 土鈴
沈みぶかありに 秋より 姫の山 長翠
花 待て 多 陽る 之 秋の山 標電
見て 五れハ 出て 今 姫の 陰山 水 万鶴里
関 当の 持の 先 なり 姫の山 乙二
酒 まて 今 あ 秋の 山 泉 水 自化
泉 子つ 戸の 口 見て 姫の山 道彦
姫の山 こそ かれ 人 に 落 に 分り 寒松
藪山の 姫を 見 きり 人の 泉 三原人
翌 ら ハ 鶴の 方に 見ん 姫の山 田人

薄 は 人 ハ 猿 て も あ し 姫の山 一葉
人 事 の して 行 あ て 手 秋の山 玉光
姫の山 鶴 は 有 て 笑 ふ 子 れ 江戸 笠浦
雲 の 立 沼 ま て ゆ ん 姫の山 尾張 井越
今 降 て 廣 る 雲 あ り 姫の山 京風
日の 笑 に し こ く 近 し 秋の山 陸奥女 龜丸
姫 丸 水 落 に 姫 氣 う 人 や 来 笑 者
秋の 事 や 多 こ 人 ん て ゆ く 狭 菊 之
姫の 所 著 て は 和の 鶴 や 大阜
走 山 を 力 に 見 る り 姫の 河 木 花
釣 氷 の 夕 日 に 近 し 秋の 河 鶴 翠

題叢秋

秋浦しらくとのてる百や海の秋　又明
鵜川　秋防く焼火に明し鵜の河　百徒
夔芋に魚のよりけり鵜の河　源女　一子
秋　秋　鵜のあ竹の根ぐらくとる之　焼家
氣韻のよく揚りけり鵜のあ　岱吉
秋のあ去身のうち氣焉さく　存亜
鵜のあ日の白雲に流れ入　徒力
鷲鴨の毛衣染て鵜のあ　士詞
ゆく年のそくれてとぶ秋のあ　松兄
子鳥深の鳥の鳥之鵜のあ　樗生
秋のあ海に中ゆく日和か　芳鶴望

却人そ足洗ひ居る鵜のあ　月化
白雲を落とす青や秋のあ　寒松
鵜　囚　秋の雨の雪の横殺通りけり　兄直
須濱ありさて雨あり鵜囚つ　道彦
毛　迫　毛ちらひけしぶれしも物ひ囚　寒松
遠ふるし落てたりけり毛迫之　女　鷹之
り　秋　り鵜や松にもたるつ氣　多醸
あとら雨や小麻の鳴も秋そり　焼家
り鵜やうら板敷に風の　子く　白雄
諸のあり雲よりもり鵜そ　仝
り鵜やよぶ花落る樹人　芽之お

白雲や雲に雲れ鶴ハ行
り鶴の雲ゐ木の雲にふれ行
こと樫に松もなかし鶴のり
されそもり雲に雲を目白押
り鶴やよくも明るる耳の穴
り鶴や雲にたまる鶴の砂
り鶴や氣ハ良ゐる鶴の手
鶴の鶴ゆれたはあるる垣手に
山鶴の尾をふまんに鶴の鶴
松樫て鶴の心人や氣の鶴
鶴の鶴柴さす海のしはゐる

素迪
鍾風
梅史
史于
北尼
女 真元
左節
岱吉
吉鶴
平鶴里
吉牛

題義秋

持しその草花見をたて鶴の秋
歯のぬけて鶴のくるしを覚り
身を伝れ居て見たくるる鶴の秋
こ居くと鶴の咽ふし鶴の鶴
掃の末に鶴ハ立より鶴見り

待 秋

秋を待つ居りまもるる桂に
小鶴ひつ黄て鶴あるしに

秋名殿

鶴の名殿入りの末に小句ふる
名殿ゐる秋やあるまの西の海
尾長うくそれまも鶴の楽殿に
五月雨 心見や兎鼻はく 九月雨

安藝

快意
助董
古遠
松隣
紫山
恒丸
子可
覚意
土鶴
朱黄
覚意

自讃

秋雑

弓張の弦引切てもとの月を　仝

蝿もみぬ跡の敷や土用干　道彦

星ぞらし墨るゝ翁と思ひけり　暁翁

秋もはや服ゑの中にまぎれぬ　寛松

石上に星すてる夜や烏羽玉　世井

ちんちりと心定らぬ[illegible]清　寛松

牙の秋やとすきあめのふきもあり　菴尓

りう[illegible]や猫の町さく米踏ぐ　仝

よき月をさへつまり秋の花に　閑更

蓬萎の住んて秋も二十日かな　月樵

秋篠は霧の尾ふる境かな　仝

寝の秋是ありは夜の[illegible]　素隣

扇芭蕉りうとかりけり　升入

秋の心さするかな松にかるよりぬ　乙圃

松にさへ蜻の心も松葉　雁児

手のいへうれつくるとぬ秋の人　尾張　弁二

萩にしてれ芭にようる夜日す　士朗

蜻の清ん心の夜ははまらうり　素暁

因の縁や追分さて蜻[illegible]　梅堂

勢戸の秋是とまゝては村落まで　道彦

芦舞にえてそ思し鶏の風　雲峰

鹿ゑ来の秋よそ新にまきりかり　桂堂

り先も沸しや秋の身で来る　大和　憑自
萬椒桔梗ならんや咲まれり　對山
年をしし只鶴の色　武蔵　双鳥
沸しされ秋はさまくの葉光に　近江　土明
萬代や垣に鶴良松に蔦　女　きく
心吹の咲ても鶴の葉ゆれ　松山
そのとれ鶴は蔦たゞ立江に　文角
破草の秋に大ぶれ地に　一阿
白髮して鶴に生るく智ふ之　古文
鶴は世の寂たる世や鶴のあり　足彦
蔵とゆり蔵とまりたりぬる蔵に　柳麿

○百五八

題雲武秋

河ほつ越て立ちり鶴の色　治国　祇枝
蔦るまも一癖あるや草の秋　玉光
智ふこそふらしゆふへの蔵笠　近江　蒼人
智ふこと吹そらしかり蔵笠　京　十壷
秋とかへや家にたゞて鶴の草　越後　二川